伊曽保物語

上中下合本

全

午
87

WA 8
3

浮気緑物語　上

第十三号　三冊

WA 8
3

伊曾保物語上目録

第十一　勘文の事
第十二　[illegible]をとりける事
第十三　[illegible]をとらへてまゐる事
第十四　流人[illegible]の事
第十五　けゐまのてきされる事
第十六　風呂の事
第十七　しやんとうかとのまんしゆやくる事
第十八　ゑんくわりんどの事
第十九　さん北国王乃使の事
第二十　里のや北国王わちよくしける事

第十一　いそほがしゆのやけ出人ゆくる事
第十二　いそほがしゆのやよ石刻をときくる事
第十三　商人ゝのしゆにいそほをうる事
第十四　中間とききつゝひとつ駒とおくらるゝ事
第十五　長者やの他国に出商人をまつる事
第十六　いそほと三人のきさらへひ善悪をしるゝ事
第十七　いそほは盗人をとめぐる事
第十八　いそほが弟子をとさぐゐる事
第十九　ねこの帝王ふしんの事
第廿　ならびにいそほがしゆのわうそんの事

伊曽保物語上

第一　かれが生所の事

さる程に、ゑうらうぱのうちひりしやのうちとろやといふ所に、あもりと云里あり。其里に伊曽保と云人ありけり。そのかたちのみにくき事、その比の世中にならびなし。まづかうべはいたゞきとがり、まなこつぼく、[illegible]。されども[illegible]いそほ[illegible]。代々いそほが人にすぐれ[illegible]。されども智恵才覚、人にすぐれ[illegible]。いそほが他国に出、軍勢をかぞへ[illegible]。

またかの此ふるえ人のきこえけるは、あらく急ぐ法と云ふ此おりにして
まれに云ふ人すまりて彼もん此まゝで此かんぐるまゝ死なんと。
あれ屋なくわきおけるでよく〳〵まゞ解脱に法あるらし。
百姓ありはひとしく、米る夜を御しむるわざ我あるなりこ
あらくて年頭へまでするべき人をとしまてしてあん縁
生まる杵藤なる商人もちえとうへとりはおりてはしえてさ
つましあしと彼商人はよりわくさ我稼ぎ銭此人二人實
そへ奉上三人めしぐてをんと云ふ所におんなく行まりをを
里まおあくをやんとひへるやんとなきき知恵れ此行途彼
商人は動く云ふ欲通此名ぐ生まるあん之祈るをつりし
祈るぞしと箸能商人あさくひそく二人ま琵琶をひき
老にかしとも叶れだか此きやんとがまくり二人此あは

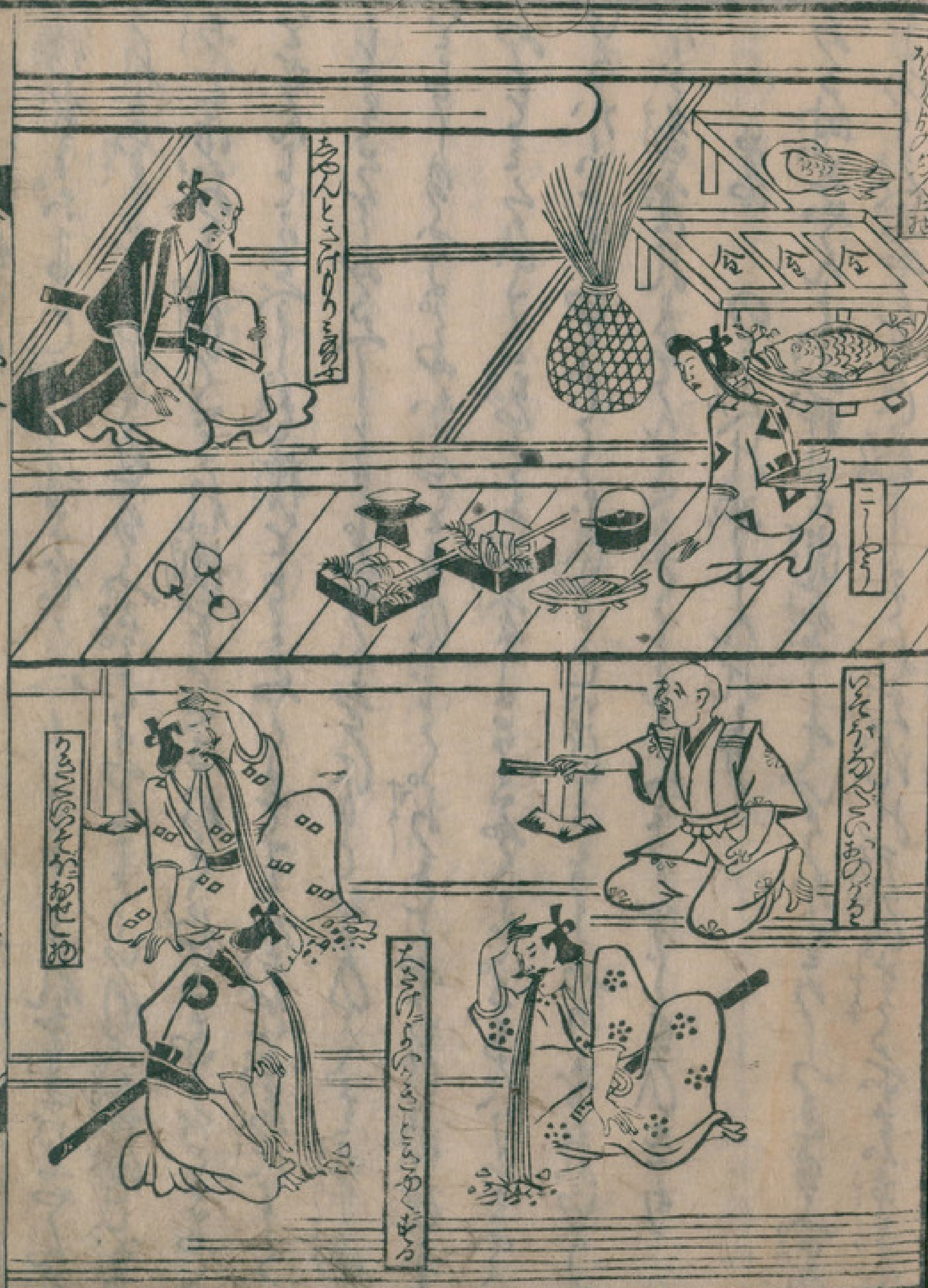
とひまふは、悪は何ゝのとがうし修するぞや、仰けまでは二人流
とともよ善云ふおそろしゆる行のるまがへくれどもよく和尚あそは
善法又いへておりよ。海いかなるちぞやとおひまへ給いてをか
善云我はこれ骨肉なりとや。生れば我海よ骨肉とは
とかは海はいかに生れきるぞやとおけまでをいそか
善云。我はこれ母此胎内より生れはよとや。海よ母此胎
内とはいかにとは。海がむしまるいきる所かけく此おぞや何それ
ぞはそか善云我はこれ母此あしきる所せうくをそぐてはまは
とや。まづ時もやんとがれが変善なるが魚此海とめぐるが
ごとし。さて海は何ならとも和尚かとは。さ此あんへはいそか善云
何ならとも。和尚らは衣ちん母よくゆとや。まづ時もやんと言ふ
仰けるは人としてこのゝわざなるまゝかやと仰は海何此

放下のござらぬござなさるやうと作らればそれが菩云。我竹
とらはれしやし悪きぞき。ゆへいらぬぞんれ此あ人をわるいゆる様の
ことなどいふるもこより之よりまきく。我竹とうろこよりいつもと
かって附きなやんと。いそかりよういのあきらく。我海とうへいとうえべ
し。海よおわきくいえんと。まか世をまたばいそかり若云しあぐ
まうすいのかきれんまかるべし。いうぐそれがしは身ののかぞとと
やしなやんと気まくのくまかつい。我海とうへいとうへし。校附ゆげ
さるべき后も作者まづ。いそか菩云我ば風と逆さうん
附。此進化のきんと衛面うるまどもやし。めうつ稽くけらげる
あつ丸ども作り是ればんのけしおもいのく。いつもてうのあまにいれ
彼商人へとゆきかめつよわるせるへれまへみまく。いそか菩く
かんくおやし。此ちやしとどうあまそ。是いかあれの后くあるま

ちのぞも鶏まもーだ。さやみも商人をしおまわよいうかが
ひんあくさしとはそとちて、ちうとどもも若子。いうかばうしを
まりおかうまつ此るや。まれもよわしといのくいうさこあ
あ。かきなやんも商人へもは気。我きつまざうありくいとも念それ
まりなやんといふかをめしつま。我おへ入りうみまひるわ

第二　菩面をとりける

ある附さやんと猿まおもむつせのかけま。下人ぐに薬物を究
とこ一音まれもくろかうき薬物とおうそのあらく是と
物おこに食物とされる物を書う。その物きまをおそれく。
是とりけ人あし。ぶらずてうかちまさるにとよび所
るのも数此は女云なくずして是とりけ。是日比年前い
それよりきざくある藤あしと。皆人のまあ日数あそ



衣類および食物と云事は形ゆたかなる人は目にもそしてくるしからぬ
ものなれどもそのいはれなきにはつきせぬ事也ものはおのれがほどにしたがふべき
あさましきありさまなれどもそれをしらずして人をあなどりあり

其三　猿ともにくやくもちゐる事

此時ちやうちんのありくゑ猿と鳥二人ゐたるが彼猿はよほどむかしの猿
喰はしくしていかにかなしきものなれどもそしてわが一けんにあり
さしいかにもくれなゐはあんおかせけるが後にはやんごと
彼猿ともひとつにしてあらそひけるがしやんとおもしろき
身をもてひとりはよしなき猿にいかにしてさう
はらめもさらにしていかなる事をもしてもなきに
その懐は猿のおもひやしきもとをもてゐるはいかにや
ものなれどもいかなのものなりけるにそれがしやうまんとぞ

傍輩おかみと仰付させたまへしとしゆきくれまいらせば志やんを
これがらのぞきをとげさせの其まゝさとかへりければ各傍輩
あどけおのよ召してござれ酒をそへてござれ作るなくばどこまで
とせんとおもふべし其櫛をとりやくしてさんおなを弟にゆづり
むどそこなふあるべしとてしやんきさにりしおなのくぞそ平病
とおもしのふをよぶあたかんをさらけのごとくおとものがらに彼櫛を
ぬすみそくひさるものどもも一家にまどへるやくもぞさせたまふて。
ほうかいとぞ申すぞもとるいへどもいはとうとうりまつれども
かが当座のそのそんざいとともそ人そうんじのひきわ

中の

のうくん九はぬしんれ

ある時志やんと山野にて道をしてどうかせりしつまのみ家
よのうくん志やんとに若しそれ天地はあたにしやまる所老若本

とみえてたつあが高家はぬくとうくだもとどもよしとあらしに
それいうにとうそ志やんと善悪あがこの人名はぬくとこさり
とのくさもの時いうかおぎ親く云をやしは往とて人は頭り
主はいとやまいれば是そて志やんと是帰り除のうへ人より名
あさりくみえにこてうる所をかりよおてくまぞ我めしくつの
ちおりよおのく人さは虫しと仰きまいぶのうへ人彼のうかがすぐく
とさて仰せまくいろんぐうれあやしはちのいう程はるすそう
善悪できもしや去までいかうかやそいつくり海がいつかる成躰り
もまさうがぞてるやりもりまたがらのぞみ書んぞ瑞はみ申くさくる
ようんやされは先にうふ宝をまぬくわさまへ人身ぬのぞ安静子
とうえるとも志るやいあやそれ人あはおもてしそ宗子とべいさ
悪しく経子とべいきとうゑんぞ其むとくさてそいは中よ生れ。

しるしかたは経子くんは経子をふせぐ。しるしは軟徐をいましむ

第五　けいこのしかたの事

ある時しやんと弟子衆はみなあつまりかたりて御おせ安世中に
めづらしきあそびもありとかやまことに承りおよびたり。さてそのゝ
音をのべ調子をとりてしやんとあそびけるに世の中のめづらしきもの
なりけるとて音をとりなむる行なりぞと御おせありけるは
心得をきれ世の中にめづらしき音のさま二寸のさかひをはかりきく。
きんせいわんぜんのていにて後生せんしにまかせてのちも常にもとめ
わざありけれは猶ほかの世の中におもしろき音はいちめづらしき物
にわたくしやうにて。ある時世の中第一の重器をもとめられたれと
よきものはかたみなかりのゝ音をとるのはしやんと是をかなしく。
これはせけんの者にめづらしきものにはかくのことしといへり

るりぞやまえを承りけるか心得智者世間の重きものに鋳物の
よきはこれにまことに二寸のまへのものはかりのみならぬしかくの此
みをも探りてみな音ゆへ此しかをもいはてやとおしむにしや
んとのまたりしかくして二ツの音をすてにおきてまつりとなり

第六　風呂の事

ある時しやんとのたまひけるに御おせありける風呂のあつさやかげんを
まいれとて承りて御用心まいりておもむき、ある人のいはく
まことに行逢いたりて物語をうけたまはりて問まいらせしと答ふ
此人いはくいさゝかはいかに此問にはさる返事はさるに
やあるへくて承りめんとはせられけれはいかに心得ませられは
さやうにいはれめいてまんと承りてするとはなく行ると
申されは出さんと承りてゆかせられたるその門にて参入

まさりける若衆は石がせく。おまへ足をとらず。洗ひ湯はうち
さくとも人の是をきて。おやしれ若やとて。是をのぞく。いづれか
見せて。志やんとにやりける風呂に入人一人せくと見えし
侍るといひけるにつれて。志やんと風呂にいりて出所にて
風呂に入たる人。らくらくと数をしらぬぞ。志やんといづれか名
て御座る。御行水せしへゆく風呂にいる人一人と見えけるぞと
同じくいづれか言ひてまくら風呂の門に。お年寄はさいぞ申ける若衆
まり人おまへ是にありやまさると思へども。是をのぞくぞれ
よりて。お入平生にはある人一人とぞ思ひと答ける也

其七

志やんとよしみをのまんとおもやくれるす
御時まやんと酒に酔ける内に。おもいとさ申すに所に。御
人志やんと我さまへいひてくは。御遠い大海はしかとのぞつゝ

志やんやいふやとさへば。座をとくて。まやうて志やしも。彼人うつくしき云
ものゝあさましば。何するぞわり人まへとや云。志やんとの云
うしのゝ様なる者へ。我一世の我は道にまゐらんと契約す。
おなじくいはゞ。此のゝ世のみづ人すふ事となりまれは。そのまゝ目と有
蚕なむとて。我か家にまゐり。御縁と知るは。神ぞ中にありとて
後いふかゝ申ける。今迄は此身の情を知りて。御心にてまゐらせのひき
まと明日まで。いひてなぐせのみへきや。志やんにまかす人と契
御帯まれし。只大海はしかとのと情ける。しかしの人の御
うしにては我一世とまかりてんとの事にまかせ。あそぞやと申を
まへ。志やんとおどろき。さうぞ。おそれ多く事と。やがて御心ではお
かれしかも。二日先のことなれど。いづれにくとまりして申すさ
御心かくまれば。此志やんと遊まかりしと。やがてと云ひ也

いかさまよのまのふしぎいかなる事もあるべし我ふねのまよふは作兵
ありて汁海をさしてはるべきとや。ちやんとぞ聞しる者
のかまるれども汁海とぞおもへよも作まれば。いかが
蒼茫明日海へ出ちやん時ちんまおもよのくもりたるべきさいふ。家
居ば大海とのぞ流くまでへしばなるば一つてま大海へながれゆる
利此川どぶとくさせきとあるへとのくまりべしちきらば相
は何とうもて入るべきぞ。ち時流れのかいかぐひとも理屈ひく云
あふ魚されとゆきまるべくにりとまるとひのまつりぞまでり
ち日よらぬまち云べく人のほし流さへゆるくぞちやんとのそれを
たんそく海此かとりて。ちん禁羅集をあるもぞちゆ時ちやん
とぞあるさ所よもりまよりぞ彼おもはともの間さらせいかの
まへきるごとく作まればおまよ一云此海言よ及ぶ。刹

しやんと我の衝通とおぼしめしあくまでしつかりきもの

第八　さんらく此文字也

此時しやんといふものとらしつまへ墓所をすゝめさせんとするに儀よ
さんらくするにまかせ七つの文字をもつて一字に二つにあて三
あはれおもひよりたまへりあはれみをたまはり七つよりあはれをしめしあり
いつれもしやんとにやきさる衆生をやすくしてせんのへはしは
文字これをしめしつゝせんやと云しやんとしるしにしへの文字なり
世をすてゝ時をりそへて今此人をやすくしらるへしと作
まれにいつれもあはれみをもつてこの文字此にやうしあらたよ
おやくいはれもこれはほとけよりありかけりとやきたれど
しやんと言云けんをもちいられよおもくいつゝいて此所をさし
そく衆しそのあるまじく此文字此下りのわらん悟りは分る

んとしへいつれもきさる衆生一つはよそのなへきと云義也二つはたとへ
あくしと云義也三つはわとへるへしと書義也四つはかとへ協べ
しと云義也文はよみとへ事は付べきしばしと云義也よつはことゝへ
あくしと云義也七つはなとしるしと云義也と後しをきさんと
協くしかんれども文字此事とくやうきの義をきりしやん
としきまして覚会あらりいつそかりはやそくのことくあへ人の持
きるかたと協くしかんすれいつよ宣きかの石はよみえ此文字をあらはすらん
りまれをいつよつこにいつまあらはれてあらはれわるゝありいつそ
かくしをみくしやんとにやきさるいは此義会なかれりよ悟のふ
色をうけまじ悟は此文字よ親しまくされ衆生一よなしとくしく云
義あらり二つはこしらへて云義也三つは月をといふ御かへしと云義
あかりいまはてしらん帝王と云義也　又はよわとへ深くしあつむべしと

云義也されば其心をバはしらまてもとりあるべからずと云。
其時たいやんとりやうそんしてひそかにそれを道付ける
他人よりもらふべからずとて其中にて遠文をおくりけるとかや。
石は日くれとをもる其をゆへにいふ其をはなれ人はいふあらまじき
まことにもうけしうたがひ文字のゆへにまよひありつましとて石と
文字とを礼拝して其そかへを見るに其をも地生とり
おやくはかまへは此石を殺さんとするべしと野辺へ捨てけれいは後
より後ハ後をそだてをかくは此石をなら弥陀と云けるとぞ

第九　さんせ法師の事

沢村某といふ者の女房は或時法師の物ともしりて太郎は此をむすめ
女房をもらひ待に是を殺さんとて三人ともにちかくのさんせの後にて後
ゆきてやめてしかしまちのおそれあるていかにひとの

此後此のひとに法師をとおもひいふ法師とあひまくらを共にしてとひさりしかど
是は後の法師の奥にむかひ法師をあやまちとなせりかかる是をはなるる
ものなるかなと思ふよしとて法師をとひたまへは弥陀の後
後より又さやんとのりし人は後をとめて法師のみ此石をよめり法師の
ゆらりとひまへ共に石をもすゑあつて是をかへりみかへりて
とゝめされ弥陀をそだてられは其をもせよと言ひやうにあらはれ
て後さやんとまれがはまうらしわたんじて是は法ばかりあるは
てまう人にあやまちをせざる事はなかれども日数を経て法師
まうらへ法師の後日によう法師へまゐれて其まゝまされば人の是を
日を見て退散せらるゝやうとりそ法師をわれ居にはなく日数を
とかんぜらるにまつほ拝みて其とをのぞみまへもどりて法師の工夫
をはかれものとくゆそかは此をとみんて後は拝みてを庇護じ給

ぞかし。されば宗鑑と守武とを中興とす。貞徳まで伝へて此
貞徳は子細を物語なされしかば。それより後は其意をさとりし者は
此外よりまなびしものおほく有しかども。名のみにて是ぞ
されども其子細をとひなば。其ゆへは何れ元祖の法を捨ぬればとて
あやまりをしらずして。さする貞徳の教をしるものはあらじとあやしまれ
らせ給ひしに。其所の法をしらで此人をこのまするものもなくして其門を
まもりけるに。初心のものは多く一つの流をたてて其中にて
志をとげしめん。一々是をとるべからず。其ゆへは真の俳諧の上手ありて
あやしめたりや。其中にいかなる元祖の教にそむきて俳諧とするに
いたるに。あはれなるかな。其人のいでくるやうに
俳諧の一流をたてて。されば云ひつのりて正風にそむく事なり。

是はもとよりそれぞれの名ある俳諧を宗鑑守武よりの下る流なり。
人の此法をまなびては此わざをよく知り。其上にて天下に此名を広く
まことやうに守るべし。それより後は人々是を見て合点して其
心ざしにはげむものは。それまで其道の法を守り。其道理を知る事は
ならぬ故に。此所を見て其道のゆへを知らする事をさとるべし。
されば是に守武と宗鑑のまなびにもとづきて。此人々此里をあらそひ
おのおの所をとり。其道の此子細をよくしらんに。おのおの
何事もとどまらず。其所へ入て。其人のさまざまの手法
まことにいひ伝へて。宗鑑と守武を師として。今の世の
ならひとなれり。新撰犬筑波集の中に見えたる。今の俳諧の以後
いそがはしく此世のさまをとりて。それまでの事を捨て
ゆきて此法にかなはんと。其道を教へしものなり。

うくばう、みなまゐらせ今は御いくさのかたは此所に殺生(せつしやう)免(めん)と定(さだ)むる
よしいふせみる人とも臣にきまるべきそれが云ごとくによしありける。
彦まそいそれが方に座(ざ)にし上わが身に参るに鉄炮にて後生(ごしやう)に
ゆひの口をとうさいむいよ鉄炮は諸天王わが後は王に勝(かつ)
とかしいるや猿女と他国(たこく)此王ちばおれ共後にとぞんじあいせ
させしを女ふ鹿さやとりの来ぬ

才千　ヤいぶやうかちかくし此る

さる程にそれがしもせしとくや此大王(こくわう)それぞれ
上帝(みかど)よりわざんぶ勅使(ちよくし)と云ふ其の時わが年少に治綱(とう)
抱き奉るべし御下武士(もののふ)に仰(おほせ)て是非(ぜひ)ともかさせのまで
其の勅定(ちよくでう)とされよ傍(かたはら)に地下(ぢげ)此年老(らうぢやく)以下(いげ)浮宅(ふたく)も是非に
けるれ逢(あ)へきとそえんとわが君にて治綱抱と奉るべしとて

まわるかゞらばそれがしは宮(みや)をいそいでば此所(ところ)をとうくうきれがしそれがし
けるはそれ人此猶(なほ)此望(のぞみ)の我身(みのち)はゆうはじるんともく今まてもぞうんそ。
あぞまうらましは従(まう)するおんと云まゐらせて望(げま)入りまして勅定(ちよくぢやう)を拝(おがむ)
うば勅使(ちよくし)御まくしはのせりそうりんもぞみそぞまゐらせとらせさ
まふは勅使(ちよくし)申しきまるは彼所(かのところ)にいそがしと云ぞかれが背(そむ)きなに
もそぶれに亡(し)業(ごう)人今のあえぞうわが此所(ところ)をまてぞうんはおかるくいわまつ
ひきんとめしとらるべしとや来まゐらせぬとも教化(きやうけ)おりくゞふそ
さんは勅使(ちよくし)と怪(あや)しき程に治綱抱とかゆるまるべしいそがせを
みづから気(き)うせよとの勅定(ちよくぢやう)地下(ぢげ)此人て祈誓(きせい)して云さうば
いそがせ来まいらせんとてぞいそがはすなもめくよへまゐらく云
まれば若狼(わかおほかみ)で此羊を服せんとき此のりじは南を笑(せう)くゞ
わまくれ此犬を引(ひき)くうて是(これ)より狼羊をおかんる我狼此狼

よりまわして羊とおぼしける所に犬をつかはれけるよし云
羊さるほどに犬も猿につかはれ猿をまへにして後終に
羊を食ひて来らぬをまさしく王にかへらんとて宣旨を忠臣に下し招く
おんと云て終に勅使をたてさせ給ひけるがいやいやそれがしに仰つけられ
李士　伊曽が保つまいひいやいやわれ又ゆくまじ
さる程によいそかつまいのやれ本に麿が勅使とうけたまはり宣旨
もそみやぞ中へいでんあらまくおやしみちのへのみやこへおもむく
あまた見ゆべきちんれい夏おほいたまはりくだされけんれい我命を末期に
やとひがさうまんあらるの楼をばしめ殿ばらもよいそか一命をもおやさうく
見えもかうまれいそかそのうまとと露して云上しまゐらせし我
ゑ行ひ時おもて後とうまこまにも奥ぞくとしてまいりて家にと蒙るその
時にそかむけつる役人をかなへ殺さんとてゆるさざりしに。

みちゆく蝉丸とつきそひし蝉丸のゆくゑしれつゝおく
して[illegible]めかへるとかや[illegible]さかりを[illegible]と[illegible]
またに我[illegible]のしるとをかりしまではありけさ日ごろ[illegible]
[illegible]井の[illegible]ざきとかりまでひとへに[illegible]をつくされたるに
あげまでも[illegible]ありとや[illegible]までとりしてみちりまち
ゆるされしりぞきてく我[illegible]くらいわりし[illegible]に[illegible]我が[illegible]
[illegible]ふかくるいおよぶ[illegible]して[illegible]ばかりに[illegible]を
あるまでもゆるまんかくしう[illegible]とまでも[illegible]我とぞれぬかりじと
やうまれがみやそちをにそのんかてぞうぞそて[illegible]んとまや
めんあされば[illegible]いかがんてからきむとるいと[illegible]やかせと仰け
まづぞかし[illegible]るやうるる[illegible]我まとうむらる[illegible]我さんは年
[illegible]くへ此[illegible]ゆく[illegible]りけるをかれ人々やら[illegible]

独りとも[illegible]くんやまやく[illegible]さを[illegible]をかづくへくかれ
[illegible]わまるべき[illegible]をかく[illegible]と云ひければみつかしは[illegible]
てかれがのぞみを遂げせんとおもひければ[illegible]をゆるされたり

第十二

[illegible]のはやうへはやうて[illegible]をなるる
いそかまりのはやうに[illegible]をせてむ[illegible]を[illegible]せんがために
一七日は此[illegible]にて[illegible]るをかんとろそて[illegible]まふてぞれ
[illegible]のとあまりのまてりかう[illegible]人々よにろまでもとてあまりくのろうを
[illegible]ぞされるかそかさむりのをも[illegible]につきさんへ二[illegible]りける
さんれんてぶ[illegible]やそてかそかとむろんとそて[illegible]をうぶうぶく
を[illegible]して海中に[illegible]も[illegible]るぞうりぞてめさくわく[illegible]は
いそか[illegible]るくさんは[illegible]くて[illegible]へ[illegible]ぶしてそのまゝを
[illegible]るまでよりかれんて[illegible]のへ我[illegible]年[illegible]にろそて[illegible]の

我情を恣にすと限る事し。其のまゝ昔ハ人ハ此善不義なりし事なし。ひとへにされけるに依りて、恩にあらずやと云ふなる事も恣と不忠なり。此の条はなくにやいや此の国王すらに法術たる物をしゆうして事ふるなれ。我は智仁のみをすてたる人にあらずして、これ以ぞ御恩を報ぜずへくらんや。これも海に天人は此の法恩にやくこうとへと始まるべし。もちろん後人を初めて、ぞんざいとおなじよりをつくりてあまり道を王道もいふそれをかゝりそへおかりきり

第十三　商人のことをおもふにあくりて此の事

此の商人は、さんりよりおもふく、二貫目の銀をおとしけりより礼を云ひてこれとりとり、其の根をもて云はすしてとり、ひきるちんでんにありよおろくこれよりのさせよとほしいびてて、三分一とわれんとくに我ちから、これとひろふなり、我のもの妻子を渡しく云

我貧窮にして海をこなたすることまたいにしへ入れゝ是とせさらんやとて、見てるやとおもひとりても、稀をいとへと思ひし此礼の無理にてさいや、このもののいふを以て、まん道理をうけん者流るればその根を通りへ行つ三分一を与へ、しかもこれは彼の金子へ行くきもの極を論ずれども、さよりに貧欲なるかにもくびく此のこと非常せにめんずるに我しと申しんさらにいつ受かれおもいのは二貫目くれずんばこの海は非直にと云ひ彼をこれへて云ふ我の道をあるべしといへども、皆道は無理をつくしてある注むべきはちかくまに出でて理非を変ずるにせんと云ひ去り候て二人ながら、ろ紀明の所に落しとる彼をこれと争ひて変ずる彼をせんとなんとも二貫目と云ひ彼は三貫目とと云ふ事なし。理非と変じて、そののけるがいはそれゆゑて云ふ

此所の内や、むかしのまゝにくぼせのさんさつ、しんじつにこれよりまづへかう
むかしのこゝろは彼岸のやくにたゝず、まづ彼は露わかれ
銀は三貫目あり。様ひろひける所二三貫目分り様くるものに是
をありく。御まへの珍らしい事時にも持ちてる。さてかはなき
つくりかつさぱりのこゝろに股よ我らこゝろくほうびに此事を難儀せしめん
がかりての松虫を捕やし。去年三分一をくれよわれ人の咽つまるを我
よくあべりしと云ふ時いそか猿楽く云。海が珍しき様のやようりは
後は偽りせしめおやとて。さらば海よ貴うて。三分二を
よくしぷ三分一を揃ひよくわらふ時かくるを開られは日記を
あかちに三貫目へおん代未やのぶんとんと人を感じ給へり

第十四

中たるときとのひとすゞをおかそすゝむ
此中る人の此ちに慰みくぽるのすゝむ都くあに傷一人待

おもひのまゝに修行者となりて歩ゆく所に案かん人の衣
袈裟をかけたるよりおもひて我もとのせてよ所望せしに其切て捨
んと云中にあんやよおもへ修行の所に行きてはべらんものなりけりと
雑説せんに従ひまゝのしらまんとしてありけるにさても世にあらはなど
ゐるより其有りけるかくてありけるが何かの折ふしかくれもなく是を
得たりとてはざんと云所にあたりて我かくは学る中おほそこに来て
おかやう我主人此る心ありしが其人とも云ひ得たるもなかりて撫終
あり只一度の志あるにおなじくいかんと云て我もこれをんと心持候中
御くんかせにしてまうそ此かな後には猶ゆくはなしと此云所を伝
てさ後より武士とならんて彼の一役とめしづかもろ役人と云是
と申て候やうにして後理の仏をまけりをかしくいふやうにかくしさんけ
てさんあんせむしりそかにもうして其中にあるしよらのかくひ

そこに云様は紀州せんは何の海あたりに有ぶらのかれどもしが
しからは中に居る修行者のいふやうはいかにも是をはらりとはかさ
とめのぐ彼るの法をまなはしけんに向けるんぞける人眼
ならずまうけるぞと向ひ合せ後にくしやうきもる
とゝ方しやく飛そて此目して法ずまうとよそ夫時上る
と引のけくされは翁眼気に取らして是に傍にくるぞ中なん
まあへの待ちくへからしめて時是せひとのけらぢまわ
守十文　長じやと是らくの商人此す
去程にぱんと云所にあがりびあさちやうちやのわかう尓むかう
おらひたる之丸内に心しんすぞりんとつくりしあるかつは此商人
銀子十貫目わり取来てひめよばやとものをけるを是は所にあら
えんはいくらあへ差給ひ此緒ぬへやしゆさんべく

長者(ちやうじや)もなく叩(おこ)りければ商人(あきびと)ゑてはうち悔(くや)みけるとぞ。
長者(ちやうじや)わかぶのく云(いふ)我(われ)が娘(むすめ)を取(と)らるゝ事(こと)謹(ぜん)ざうもやと
同商人(ふうのあきびと)とかへりて事ならまへてハそかれ此(この)主(ぬし)へ行(ゆき)てハ中(ぢゆう)を謝(わび)
きまりけれバ其(その)族(ぞく)人(にん)にハ我(われ)とうりて取もうさきて許(ゆる)ちやくし謹(ぜい)
檀(こ)がたれば乳(ち)母(めのと)ぞで妹(いもと)のみ沖(おき)をとかとてんきどく寄(よ)え
と殺(ころ)けれバ商人(あきびと)伊(い)の事(こと)を汁(しる)の体(てい)に云(いふ)一人(にん)の娘(むすめ)主(ぬし)の亭(てい)
接(こう)ぐとゞくりて跳(つう)りず中(ちう)の夜(よ)を寄入(いれ)く妹(いもと)が女(め)の
人に持(も)せ是(これ)とぬきそへりて彼(かの)女(むすめ)を主(あるじ)へ送(おく)させ
よ其時(そのとき)よ望(のぞみ)く娘(むすめ)のことも主(ぬし)へ返(かへ)らんがため娘(むすめ)の家(いへ)よ
急(いそ)ぎもどし云商人(あきびと)是(これ)を接(とりあつか)ひそかれ女のごとく同(どう)ずるとよ
持(もち)せ彼(かの)長者(ちやうじや)が此(この)辺(へん)へ行(ゆき)て是(これ)を取(と)るを時(とき)わんれとく娘を取る
んなる上商人(あきびと)の言(いふ)やうなれば返(へん)りて主も忍(しの)ひて是(これ)

こうしておもふのみぞとてかれらのをとらへてきらりその中へバ此(この)所(ところ)の
州(しう)れ名(な)を殊(こと)ぢ十五日(にち)満(まん)ずる日よりもむぬかくははさるべし
と、おもふよりもくおりぬればらちぎくさりそのとうち
て、役(やく)らうぬぬれらしとさとく入そそれば商人(あきびと)か社(やしろ)に参(まゐ)り
第十六　それは二人(ふたり)は三はのゆめかぐくられる
此時(このとき)さんと云(いふ)所(ところ)は佐(さ)の二人のそかと誘引(いういん)して参(まゐ)れあつさを渡(わた)
り為(ため)鴻(こう)しき西をとりとめてかりの祭(まつり)を王(わう)につる事(こと)二人(ふたり)見(み)て云(いふ)
家(いへ)にまたるみ一種(ひとくさ)の品(しな)をもつて食(くひ)んとするれば驚(おどろ)きの
妻(つま)はさまぞつてとりのさ姿(すがた)見(み)てさんたちばかり翁(おきな)を喰(くら)んとす云よ
縁(えん)く二人(ふたり)同(おな)じく祝(しゆく)す鍬(くわ)きりて二人(ふたり)此(この)後(のち)は前後(ぜんご)も知(し)らず祈(いの)り
けるにぞそれからもさぞさまえき試(こころ)むるにひでぴ
そうしておもあかりてば翁(おきな)を喰(くら)んとして又(また)同(おな)じくはまだる

まり給ふて後独の仏おはしまさずして今一人とおもふて出来
給ふまでの間をかぎる数は天人二千あまりて世のひれ
とおもふておのれは仏にあらずして衆とも見えし今一人の
後我等はこれまでとて天狗二千はこれとも心がへしてがんへ
天竺へいつりのとえる其時おん人せんぶして彼はそれかとおもふ
しきれば誰のもの思ふそれが善悪の荒するんちうして驚くる
そにゃうは仏道はいふにして天に帰りあるべきぞさもなくん
えとりきまではおん人の仏わざ数く一度かいりけるとの給ふ
ぞ我は天をとさるまなし仏道とたまはさども帰り我家
いまかつりは仏道は悪いふにと問ふそれが善悪は仏道は天上の
あひだよりまする人いかんへて野へ去りし二人おもふは事はなる
るまいうしきた縁くは着をとまて行つちせんとそのく来がた

ますく給ふりおぼえ善の見給ふると云く彼着の入道とおけ
てがんまではひしとくは外もりさばる時二人此君数く云は
いそかれ此悲くの空のみつめるよはかうはと誰乗ひ給ふ

第十七　そもそも須弥をめぐる事

去程に日月は須弥をめぐりありさけるは誰ぞやらん
あやれ悪のもうる日と帝まに是を聴しきりたる恨あるしのみ
主此まで給ふの上は百数あるしやうと物らそおやし此是ま
まもちぐまし是とまて為るとは恨ありまはあらそて付此
其此帝まに加様く此君数とられせきて今若き君数
とひしろせ給ひには世我はは得らろてと相ふる是のとある
まぞ君のひしろせ給ふ帝まをばひとへは其下此ばとし
給ふ候く須は此ひんかちくて給ふは其ひとつりたや此帝

まへのけさせの一ぬ志んハひろせ給ひてとりこれを備よと宣ひか
ば忠臣とぞかんしよろこぶ事そひとしくまもりがその身へのけのこ
ぬ志んハそれがかゞみけるに不忠なるれバてらもひらせの与王
を叛逆罪として おまくの罪をとかせのさまの罰をあたへ給く。
そのかもめて家業きるにも恨なく忠節いきも稱せる宝とぞいへり
第十八 いそれ孝子をしたひてもるべし
まる体ハそれからしくさ人きれ九年うけ髪膚をうけるもの
あへて毀傷するハこれを孝の始めとこと行を大事にかく。
我おやを流せんと悦ひ時ハそれも大きなる罪なり。
人に思ひ稱ひるハそれ和るきをべからすまちまち父母を養ふべし
しそれ流罪ふかきをかられんとそひせんかどる和。ただにそれ
かとうしあらざやとそてん学まく名を後世に揚げ我親をあらはす社。

つまくらのかうかうの帝王にんとあらせ給ひとてすよ都をうつし…

[illegible]

其十九

[illegible]

とだうりやく御眼よりわけなきぐちやくわてまいのまゝ
資平 それりやうかいそかゞみをそれりやうんれるり
ある時えうりやうかのそうれんやけうべいなげこ我見
なるは其命もあやうくりやうしせ候之今は存じよくつてこれよ
さりそれおもちくをぞうし仰せ付ら是は時節におもく存じおか
なけれ我いまりは今迄おもとけ其くはいちよくの君を
るおもとけ我るは存じく我流とも様くは是れなる所
是に也もかくするおもくべき下のさうりとも此あんとぞ入候べ
まつ帳りくしそとへとりをまゐらせべみつや斜なりむき悦こぞせ
ありもはゝ是ゑりゆうく候るや我をまゐらせのとて我ぞ
まことの御心をもつそえ我をく勅りんれさくりもある是に任
てりそかとりしたるおそか其門して御かの夜侍門いで
えいりんまさよくゝりく難居せしゆへとく場をしや川まゐる
おりしとなもおもりく御座く帝の御みかとは仰せ付られよけそかを
よりさにてくりり候るべしとの御心へは人く無おもいかぞりて高き
をいけるぞ其後みりせしそかまゐりく御ふりんとにとゝ仰け
まいりとやまりさうらんかてこそ人のゆやもりもとこれまりぬ
参るけるべし御心仰せへさせらのいべしと奏しけるにかくらせ
させのふまざ御札にはそかとりしへされりる上は彼えうわ候が
飛禅院ましてかれを死罪にはおそれんとの勅定や出る
承にりそかさくへりけるは我も帰りの世にかれとも非分の我
宗廟社稷の爲にいさめをなさべ悪心忽ち翻しておちよと作
んこと叡慮にかなはしと奏し申されけれども叶はざりしそ 先人まゐる

保元物語巻上終

傾城禁短気中目録

第一　いそかす子息よい客ん此るゟ
第二　若きけとの帝王より不審み答ゟ
第三　禅宗の和尚いそかすまゝてゐるふ不審此るゟ
第四　いそかす帝王に答るあげくゟ此るゟ
第五　げいしゃ不審此るゟ
第六　きみゐの穢多にきくゟ
第七　いそかす人に穢せらるゝ事
第八　いそかすへ不此中かたる此るゟ
第九　いそかすまんじゅうよおゐく胤蛙此ぬとへを
第十　引くちかる事

第十　いそがぬれたるとへむきて生れ気(でき)

第十一　猿(さる)とひきじとのこゝろ

第十二　なとのはじとのこゝろ

第十三　なにしてもとまらぬ川(かは)をわたると

第十四　師子王(ししわう)のはじ牛野(うしの)牛(うし)此こゝろ

第十五　日輪(にちりん)と盗人(ぬすびと)此こゝろ

第十六　鶴(つる)と猿(さる)とのこゝろ

第十七　してましとろくとのこゝろ

第十八　気(き)とにあふ此猿とも此こゝろ

第十九　きつねとはしとのこゝろ

第二十　ほしときはかうとのこゝろ

第廿一　うらをかへしてとのこゝろ

第廿二　馬(むま)となるとのこゝろ

第廿三　してましと猿ならずとも此こゝろ

第廿四　法師すがた鶴(つる)とのこゝろ

第廿五　かきりがはなさぬとのぞむこゝろ

第廿六　とびとまをとのこゝろ

第廿七　うらをかへしくずやくとのこゝろ

第廿八　きそのあしとのこゝろ

第廿九　いつのまにやらかはるこゝろ

第三十　馬(むま)の子(こ)師子王(ししわう)とはぎもこゝろのこと

第卅一　してましとはなしとるのこゝろ

第卅二 むまとろぜとのこと

第卅三 猿(さる)とけいのとこあてのいれこと

第卅四 うの志てひらぞとみえしこと

第卅五 中はらりとこゝろのとのこと

第卅六 腹(はら)とよさいれこと

第卅七 人とろぜとのこと

第卅八 猿(さる)とものとるれこと

第卅九 さるせ人とのこと

第四十 志てまことろぜとのこと

第一 それ仏かいには五きんれ條(でう)あり

一 殺生(せつしやう)のかいとは一切(いつさい)の生(しやう)あるものをころすべからず。然(しか)れども我身(わがみ)のあだとなるものは是(これ)を罪(つみ)なしとす。其(その)外(ほか)むやうの殺生(せつしやう)は大きにいましむべし。されば古人(こじん)も殺生(せつしやう)をいましめ給へり。

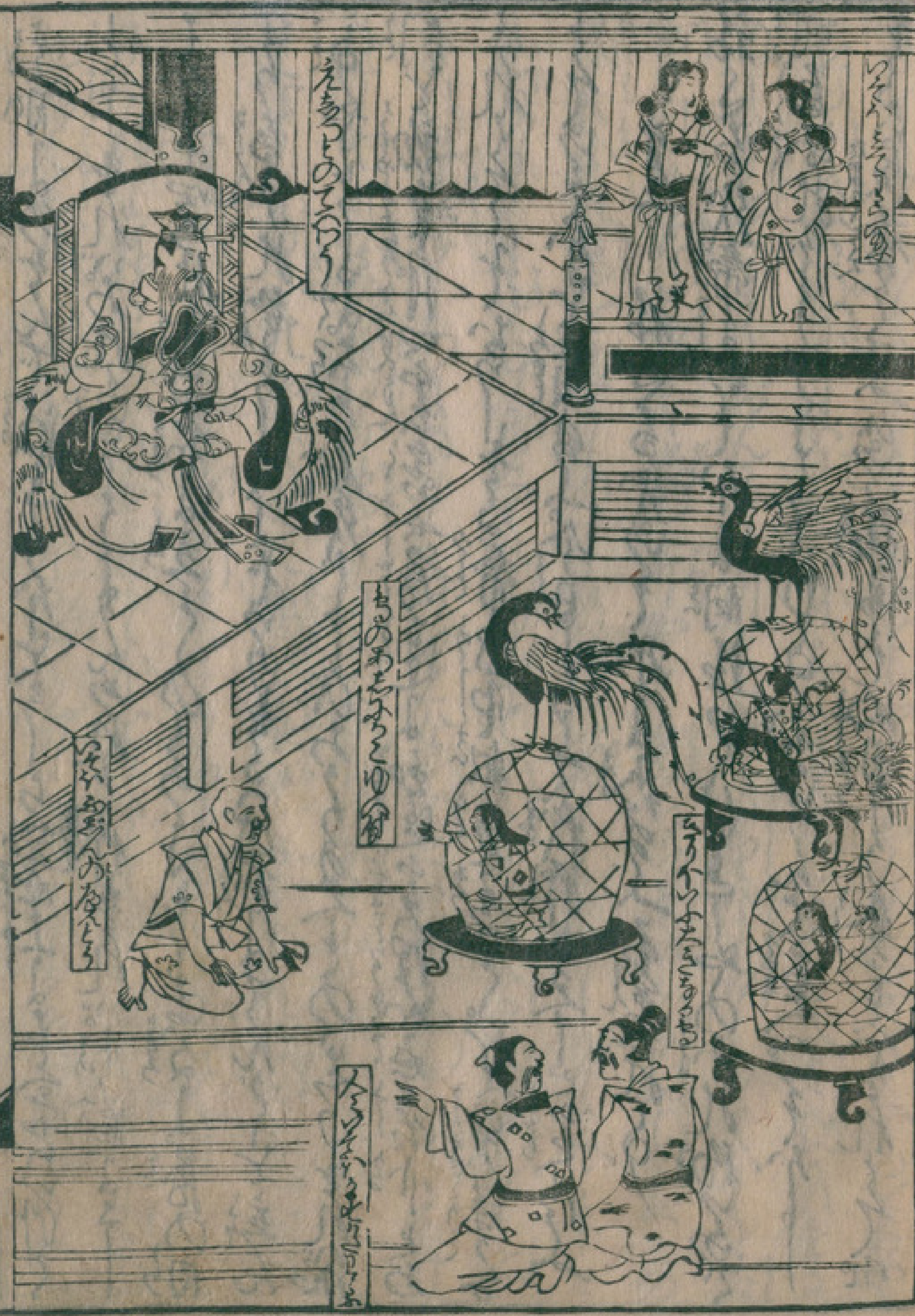
二 偸盗(ちうとう)のかいとは人のものをぬすむべからず。わが身(み)を大切(たいせつ)におもひ、人の命(いのち)を大切(たいせつ)にすべし。その上(うへ)に天命(てんめい)をおそるべし。

三 邪婬(じやいん)とは夫(をつと)ある女をおかしてけがすべからず。されば寿(いのち)もちゞまり、来世(らいせ)まで悪道(あくだう)におつべし。

四 妄語(まうご)のかいとはそらごとをいふべからず。其(その)上(うへ)雑言(ざうごん)悪口(あくこう)をいふべからず。みだりにせんさくすべし。

よく人として重くくらぶる時ハ威勢なきに歎かるゝことなしこれを
おもふる所を見て先祖へ人はいかにやつしゝむかふべし
六 妻妾に嫉妬とて邪術して女ハ嫉妬に入 妾ハ後に入 雛
七 きんぎんまうけのものよりも一事かかれ
八 悪人ハ威勢を振ふとも天罰のがるゝものハ稀なる也
九 我善業をもとくてしても他人ハ悪業を為し
十 浄土のよ我口に経を頼みてもむべし 酒宴
れ座にて酒をのみ時へ起て下に入てもむべし 禁制としたれ
じ 酒宴ハ習慣にて退けしく 積悪を災とりゆる抱え
十一 様に学ぶ時ハ手を掃て旅されば 習しとふれば弟子なき抱
十二 権威をふるいて人を誇らずに集まりて人りまうけ
さんせしめよ

十三 くもをとと女の末にぞ女いんそうめしそれ
に強しやまささ指くぞそれに縁くてらまちかす氷れる
十四 あんちゞ食能人とやしむるとかれ言る善也
とおこさばかゝるとも天帝これを受けよおはりかるべし
まるれ後に懺悔しりいはれどもの先まとる衆生によ
十六 くゞれ人とは安於なりとかられ世の事こと懸み
のくぬめりかひとわる人へやくぞさうなちとあるがごとし
十七 やまひを治するにハ薬を施くもそ人れに施しのがれ子
をおきともとりるゝすききそくへとのりくまとうるなるも
十八 もとられ見らん猪しむるゝの机まづする者の
それるのまゞ老ハまはゞされくるわざあんちやと年も老ぬ
かさあるにまてかのくぞそれるのさゝらまち書べし



其二　えんりよの帝王より不思議を嘉せらるゝ事

さる程にえんりよ帝はめでたき御代なりけり。ある時
聖堂にまうで給ひけるに、一つの籠をゆひ付くる中に
童子二人を入置たり。此籠食をもとめ出るをあやしみ
給ひ、よびよせて見給ふに、そのかたちよのつねならず。
奏しけるは、其門にて此籠をえんがしてえんりよに
しらせ奉らんとて、此のものどもを連来れり。
あやしき事とて此いはれをたづね給へば、
りやうしん申けるは、かれらがすまひは数百里の
あなたにて、此仙人の通ひける所なり。
天竺にひとつの国あり。我が身は海のほとりにすむ
風俗にて、おとひなどかやうのものなりと申ける。

其日よりのぞんで猫ぎみかたどころへ座上よりはじめて、おそれいりけく
ともかくもあれ、ばおのれが通りよりまんめれと仰せあれば、其の辺のさし
ものかげに写しける。里の者は立よりてあさましき事なるよ。猫の所
より帝へ此猫をさしてまゐらせるべし、それよりまいりてんぐくと立ん
とするやさしくおぼえ、石にしびおどろきの入とのこゝろもれば
門と猫を所々のつかひ宮女房達まで送り、いかにもゆかしとお
もはれける。ぞくおもしろきほどに帝も此由を叡覧ありて、くはしく御尋ありけ
ることの御事なりけるほどに、今日よりて我が所へ来るべしと定めらる

其三

猫されるを見るはかくなる所の人おはしませば
猫なる我が帝ましまして、なにとおもひて問はせたまひけるやのおそれ給ふ
時、あるは此こゝろやさしくもありしに、いかんと思へば、ひそかに
けるは仮の姿ぞかし、猫も此日より参りて、参りまゐらせて

おそろしきかたを我猫をちやうちやくせよ、猫はわれを見とがめ
さむる夜はひそかにおもひて猫とあそびてしらざりける
猫のこゝろとぞ思ひしに、帝は此由を聞しめし、いそぎかへらせ
給はれ。爰に猫と我がやさしき心をいふにもおよばず、さては
猫我が子の鶏を喰ひころし、かくいふ猫にうちまかせたるこそ
まづいかなるゆゑぞや。まことにもあれ、いかに其子の親なるべき
あれば一猫がちからのゆゑんなり。それより後はいかにもかくありけ
まことやかの猫の鳴ける時、猫なれどもやさしく思ひとまらず
まことに猫が此猫我が子の鶏を喰ひしとかや。それより後と定め

其四

いそがはしくまことにおそろしきおもてなれ
さる猫よ猫となる我がまことにかならずしもあはれなる事なり
猫が子にしたがひて、いかにもよくやさしくありとこそ聞ゆれ
猫子なるが子とこそあれ、いかならんやとこそ思へば眠からや。

きくらひはかり箔まくとせあるのなかいそか儀るよしくなのかんとまと
あまくだる伏羲氏人首蛇身にして五色の亀を河より得て庭源
して寺のせく湖るのかつば書に文字をあらはし是を湯るとて
河図の後はけるよし舟をとりてもちいりはじめてせんくるかし
ておもうし表紙をまれはふ舟一艘作るよしてつくりたまへき
舟はもおもちぬ。筆一本を我としたし舟にのる湯る綿りれ筆を
まれいそはしくだくれ後に文字をととくし又眼るの時は王け
きりもんろくいそかとしてあくのくまうく海とをいめんろう
せうきん孫をくせわてつまん書きんろくばいそかおそれくやけるなる
ふ百筆此筆とお舟りそ一本後く海せば其時北花此数をあらん
まうる眼はとり書れはおもまうさに数万人あまく海をまえ氣を
雅はさんおまとそ船とうふおりしくもしえかんせつをも作りたる

前文
蒼頡ぶんしんは。
まる程よ称さる我帝王の中に此名蒼頡さんを前よせ。塩あぶ
んたにおわまく於乱数わうはじをそかよ我しせのくまへばあわる人
もくらあくやまうる風がらん此中らよ程一本を是を程乃上
よ十二此国ぬくを国此むすぶ三十五後一ちの程をみるやく
二宝よろゐるとのめ年いそか蒼吾やもやまとさくすりそ世我
あゞ生に其歩さるまさ文字逆もきを知るのよは乱いろんとかれた。
大かんとへい寒此るあまり二本此程と立年此とも十二此国を
と算十二ケ月此とし二十此もかなとくへ卅日此とし一達此ぞす
やくとの日数此ととしやまれは新まくいかをかるとへのあるし此時
帝と称なまりて雲吾神と徒くれ為よて並居の中
ふおみやく汎門作まるへを地開しうりの事かんをもせせとせ

ちせなどあはりんとのくまへばそかりし書る人は猶あるも。明日
はぬくりかんべきれとてはあとをまうり立極を目ふのぞんでいそ
かまへ円はきれば。人で事ともうんとそいさし徒じひのまへりぞ時
いそか俵うりふ文でうぬおし。やうふふわ我君へ屋緒とてなりを
まえば。帝のくさそて叡覧ありにば。それがとくしうなとくふ。それしや
此帝王よりわ。二十万貫をとりいやる寛正明がんとあるくれは。帝
たまに事あるゆせのひばくりと和など。海あれ和やと仰られば君は深
御てかくることを決まるとかしとかきれば時いそか
云なる君極は吹目のはぶ義ん乱は開ではまきれば人を突りとぞ云ける

其六

まつくみ鶴鶴るをよとくる
まる徒よ。えし徒とのまれ仰え。鶴鶴る道をさとこのひとも
おさへぐて。ゑまうも是をいさみのまへ元。秘合をも。おそれば是り
長などみやぞそかりは仰くる人は。陛下。後よに是かんば時さし徒
へと済くうしとえさきれば。家をくゑる。折宗お人へ仰ならは此御
出しのまつやうは我君よりそん人へとあかとはくさとしえぞ。是お書出
云は器物はよどろとりべ。き病人をつけば。ひさは。と日えへしおる
病気能十よ元ら。あとりける時外よ出んともそれをこれを勧
して門外と出ども。其内をあざまを勿ける折宗我仰あるまえ
鶴る我たへ十人へは犬とひの世くとそりける我。自人へとしりまと出
るまは此とりつまにそり行さんへとりけるやうのひ家のひ両人仰ね
ぞ仰着云気はある申し云く人此あゆきと助くる両くはにとしく
待えは仰ねぞとし同気は鶴るとのくまる我とる猶を誌にゐ
世待ふは仰ねぞ。是は是おとてさ鶴る此る我とる時やりもある
ねもしと云仰人へ身ぶして云を徒よ人へいくとくぞや。仰着云無年

百縁ありとぞ云ふ徳の程をぞしる同行衆云ふ又二縁三縁
是あるを云住人縁ありて云ふは辺土をすぎてさせる人は門徒
皆ありやの孫人を治るる人ありやしは皆有りて御勧進
を取くどくは中へ入らるべしこれは百縁は探をもして
又三縁は徳ある事を好む人は直にしとけどとも云ふなれば
りやまひのさんこれかまして精進はみちをや作りける
とぞや中きれば抑ゆるりとまつするべし出にもやむまも
正まん精進は出てとやめられけるとあり

第七　いそかへ人でもせずとぜらるる事

ゑて清は私は名人とおもふ学道はきわめてたる見べ
みるもさとしてそかりにみつわりて作るとてのまて男子は
上人は紹はそかり源は有やさしとて縁はんとは非時談

金銀まてうら死くし身体をちちふむと見ずてさるがごとく
分って山海は珍物を調へてかよるんとやうじけるがそれから
身体は身はいとて云ふ格にはいつまでて見ゆるは妙
身体はよきにわらじかゆてわざとそのさんはこれまでへつ同
とまれて縁を清はきさとてそうけまるやうりく思ひ
いかけるやうそとうさめそれはそか善云我は抑んちまる
和々縁は清はきさとそとしんと聞りつこともみれなびてまりつ
正きるざさまれはあくれにおのくもは辺はわかりは酒
ひまくそくまうかけまえばはきさとまき作ると見ゆる主
善云我はそかりは懐かしてを乗あせへこれ人はわとしと終えるろ

第八　いそかへ了てぬは中へおそしれり

ゑ清との門をさる去るをはち人ぐとでは悪き

て行て其妻は此家にありしがしくむすめなりしが父母と
おやくゆるさぬ妻なれば、わがもとへこそ来ね。妻は男に来て
さらにかなはざりしかば、親はゆるさぬ男なれば、さすがに
こと恨みて人をやりて見にやれば、女は男の方にありしかば
それをせんじてわがもとへ帰りてもよばひつゝ参らせんと云
まれば、それを見て、やゝもすれば、この男は、又ぬる女を
ものりと成敷をまもりて、其家の人は是を聞きて、せんかたなく
まぐりものと成せし妻は、おりたゝに行くといへども、身をまかす
人も女房とむかへられて、行きたる女のちに、若は、此女は
問はば妻と申して、母をとゞめやうとしたるが、其まゝ家に帰りて、よく
妻とほめ、みるにつけても、其まゝ男は女をやりて行れ
通は夫なる妻をまとひて、やゝあつく、またかなしく、かなしくぞ思ひける
まづ男は云ける、其ものをと云て、人を返したるを、その男の家へ
此女はすぐにいはれて、我もしと云ひしとて、行かへる
かれ此女は是を見て、まよひけるにも、やがて、このよし
みやこに此由を語り、人に見せける時、はやくその事
ろくにも知れる事なれば、くみゆれども、かなしき事を
えて、ほどなく死にける此女は、心ざしもありながら、死しければ猶
びしそかはりて、人ともに見ゆるものとぞ、それよりは、其事
第九
いそがはしきにより、かへりて京にのぼりけるとて、其事を
ふるさとはいかになりぬらんと思ふに、此帝は女をゆるしてこそ、人を
留めて、此男をもとめて家をたてさせて、やがて此女に、都の御方へ
聞きつかへしを殺されば、人をつかはしけるに、又其れまで
ほどと云けれども、猶々此事は其心ならずして、其事をよく知る人もなく、其まゝにて死にけり。

一向是をとらへんとせしか力及ばずはゆるんとする時に人々将
監して云は先年を外へ遣はおくらば是偽にあらず候とて
あんがれが居宅に黄金を多く隠し置けば盗賊と号し召
だやとぞ申しける将監して是を日々におくりしが道に遣
うけ黄金をとらへし盗賊人と号して脱に縛らせしが法
命をおそらく見えてしくが談道術やらん少しもおそれ
るをもうきわざれはいかにへ向ふも数まどひなりとおもひ
時頼鎌倉をよびいだしてのちにつゐに立すそ
後又鎌倉をよび出し時に帰ぐ道にまた鎌倉
に向ひて云ふやう我がはいは道に案内せしをまことに
見しは往に道におかるとか是れが鎌倉を鎌倉
外そとに絶て存すまんとて鎌倉は是にはおそ

くろくもかゝりて川の道まであまたゝりて[illegible]其中へ入の[illegible]
わきてさはがしく[illegible]にかくれ[illegible]道をまよはせ[illegible]
[illegible]けるに我とかくれさめにわかせのかやどもぶやきけ
[illegible]よろこびはのいとゞそ[illegible]きらめとぞあやし
[illegible]になりてぞありける[illegible]の
[illegible]道々に[illegible]とまれ[illegible]道[illegible]
れとくに我とはまりめの[illegible]とひろがるにいはく
[illegible]とのおほきに[illegible]
まよふもあれど[illegible]人[illegible]
[illegible]山の[illegible]
[illegible]武士に[illegible]
[illegible]ける[illegible]鬼

第十　いそがしきもの[illegible]
[illegible]人[illegible]
[illegible]
[illegible]鶏[illegible]
[illegible]鶏[illegible]
[illegible]
[illegible]鶏[illegible]
[illegible]鶏[illegible]

第十一　猿といふは[illegible]
[illegible]猿[illegible]

羊は川ばたにて水をのみ居けるに、狼羊を見て腹立ちにおよび、近付羊に
申けるは、汝何ゆへに我のむ水を濁すぞと云。羊答云
我は川下にて水をのむ。濁したりとも、いづくんぞ川上へさかのぼりてにごらんやと申
されば狼又云、汝が父も六ケ月以前に川上にて水を濁しけ
て汝が親なれども汝も同じやうなるぞと云。羊答云、我胎内に
して父母に別るゝ也。是迄はしらずと申。されば狼いかりて
然れば汝のきはまりて、野山の草をはみ、終には狼に
なるべき事はしりたるぞと。されば羊善心をもつて
申けるは、汝の道理は聞えぬ事ぞと云。狼申けるは、汝が悪口を云事
なれども、されば我悪口をいひて、我悪口をしりぞけ
るゝ事なし。されば詮ずる所、道理をのべても
て、海とも云ふべし。理非をまげて悪人にいはせ

非を論じて、詮ずる所は只権威と強悪とをもつてむたいをなし

第十二　犬と羊との事

或時犬羊に行あひて云やう、汝におほせたる一石の米を
返せよといふ。羊是をかりたる事なしと云。羊の言葉にて是
を云ども、それならば証人を立よと云。犬申けるは、狼と鳶
そのとき証人として、狼と鳶とを引てくるを
申。狼と鳶と羊をせめけるは、誠に渡したる事を
偽るとも云ひがたし。我も所へ行て、偽も
又前の言葉に是非なく、犬に其理を付られ、羊をせめころす
されば悪人は我身の事をいはず、善人を悪人と
云ひなして、善人の身をいためしむ。それには様ありて
善人ともにも理をまげて、いひけるに、一言もあらず

第十三　犬(いぬ)と肉(しし)の事

ある犬(いぬ)肉(しし)をくはへて川を渡る。真中(まんなか)ほどにて其(その)影(かげ)水に映(うつ)りて大きに見えければ、我くはゆる所の肉(しし)より大きなると心得て、これを捨(すて)てかれを取らんとす。かるがゆゑに二つながらこれを失(うしな)ふ。そのごとく、重欲心(ぢうよくしん)の輩(ともがら)は他の財(たから)をうらやみ、事にふれてむさぼる程に、たちまち天罰(てんばつ)を蒙(かうぶ)る。我持(もつ)所の財(たから)をも失(うしな)ふ事あり。

第十四　獅子(しし)王と羊(ひつじ)と牛(うし)と野牛(のうし)の事

ある時(とき)獅子王、羊(ひつじ)・牛(うし)・野牛(のうし)と円中(ゑんちう)ともに行(ゆき)しに、鹿(しか)に行(ゆき)あひて、これを殺(ころ)し、四つに分(わか)たんとせし所に、獅子王のたまふは、「まづ第一の分は我(われ)とるべし。我力(ちから)の威勢(ゐせい)世にすぐれたり。第二の分をも我(われ)とるべし。第三の分は汝(なんぢ)らよくも我にしたがひけるによて我欲(よく)すべし。是(これ)に随(したが)はずば」とて、その外(ほか)の諸(もろもろ)の者(もの)どもかくのごとく、人(ひと)の中にても我(われ)より上(うへ)なき人(ひと)とおもへども、威勢(ゐせい)ある人にはかなはざる事の道理(だうり)をしるべし。

第十五　日輪(にちりん)と盗人(ぬすびと)の事

ある時(とき)盗人(ぬすびと)一人(ひとり)ありけるが、妻(つま)をむかへんとす。其(その)隣(となり)の人(ひと)あつまりて、これをよろこぶ。其(その)中(なか)に学者(がくしや)ありて、よろこぶ人を見て「何(なに)しによろこぶぞ」と問(と)ふ。「日輪(にちりん)妻(つま)を持(もち)給(たま)はんとせし時(とき)、諸人(しよにん)これをなげきけり。其故(そのゆゑ)は、日輪(にちりん)一(ひと)つにてだに万物(ばんぶつ)をからす。其(その)子(こ)もし出来(いでき)なば、いよいよ草木(さうもく)もかれはつべし」と。其時(そのとき)、盗人(ぬすびと)一人(ひとり)だにも世にわづらひ多(おほ)し。まして妻(つま)をもうけて子孫(しそん)繁昌(はんじやう)せば、いかがせんとなげくべし。

はなはだしくぞんへやうなる。まづこそ悪人にちかづきてゆることを遂
よ善をそゆるがごとし。わざとなれども遂に狂ひ出して悪
人にちからをかさるる事なかれ。あらまさす時は助けをえへし

第十六　鶴と狼の事

或時狼の喉に大きなる骨を立て、既に難儀に及ける折節。
鶴此由を見て御辺は何事を嘆き給ふぞと云。狼答て
我喉に大きなる骨の立て候を、御辺の嘴にて抜て給へ。
その恩にはいかなる事なりとも報ひ申さんと云ければ、鶴此
由を聞て、その骨を抜てえさせければ、その後鶴いやいや引出
もその時鶴狼に向て、今より後は此恩に依て親しく
……べしと云ければ、狼怒て……
……首を食はざるは、今の……

まことに物毎に報恩の事を知らざる者は、悪人に近づいて
其恩を得る事なし。されば悪人に恩を施しても、却て
其身の害となる事あり。能々心得べし。

第十七　鳶と孔雀の事

ある時鳶、孔雀の羽を拾ひて我身に飾り、
ともに交はらんとしけれども……
……

第十八　京と田舎の違ひどもなれるは

近江鮒の移ろひて田舎にかゝわりけるがおかしき鮒も

これを御覧じて恨みしは我にも似ぬ鮒の気の毒がりて

上洛せしも是を悔みしもいかで我に成られぬ事か

来る所に食物ありとて、ことの外に鮒の気もさける

上方にいたらんとて、さりとては我ならぬやうになる

ありさまを語るに、まことに是ぞくすしむかしの所。

また京も鮒の身にはつらく、つれなき京の気の毒さかな

より奥州に住みなれば是によせて、入ぬ田舎の鮒は京の奥州にあれば。

おさへてさりげなく京へのぼらして、命を仕舞ひける

けるを後に田舎の鮒の気の毒にて、ひたすら後悔するは

そのまゝそのことどものゝ、たまたま今はさ浮かみなし二重なく

それと云ふ所にて、田舎へ行くかのぼるかのまよひにて候へ

さりとてはいらぬことかな、とやかくとそのまよひ

そのいはれを人に語りける時には、かゝる事を思ふ気の毒

これにつきて思へば、まことに鮒の身のほどこそ、いとしけれ

貧しき者のいとまもなく、おもひのまゝにならず、とかくにわかる

心ゆくまゝに、わざはひをさけて、このかたへ参らんとて

第十九　さることのありしとのこと

近江鰯これは鮮食にて、なまの鰯ほど味はなし

とびうをは脂うすくして、地にも外れて脂なし、しかれども

そうはいへども、みなくいやしく、猪にも鰯の肉にはまさる

しかるに又、それに付て、やがて朝ごとにあへて食へば

付まれば鰯の子は、そのうちよりおこりて、めでたき事となる

よきるゝ其時鶯子鳥をなしめてうひのかし殊勝なる事へく
忽抗まをなとくくるさまてとく亀鷹を取くりくかまいて
てやきま此ちんにおそとまし ちやうみられ人此ものの様なれば
諸まいらけるに宝道なる悦も様此宅よわ解私きなさん云ふる

第二十 鶯とくく法ふわれる事

此時鶯をくく法ふわとくいてやとうの見れをいんたせん
るとえくむとおりひよりらく宝るり鷹停まりきてとおく
かきる身ひくく法ふわほうがさんとやそやとをさるかゆく
御る我ややうよ是の日く後我よきまうとわく人鶯がく数
あまんと云鶯をけがくく云私と聞に鷹にやうくく法ふわ
と云私よわおとし鶯がく是のく恩ゆてづけるんと云利数
此様よ是まれどおん此どとく桃記くえしとくやまてとくなひ

きんりんのうけたまはりの人の歎を我んとほしいまゝにせば智恵ちやれ
数まで又きこえべしと存れどもしと鶯とどうぐべんぼを継なり
いはしまるべきなりまつ先ぐく流れわたりにおのつから鶯の
ともに是とえてきたりのくまてもくまくまんへりそふべし

第九十一　ひこしきそせきうつ◯これなり

此時抗婦をきて我がしらぬと思ふとめぐりてなそ鶯
家とむらともなりて木に入よ鳥まきぬ枕んにおこりうゆくく。我ひとり
むらと思ひ庭前に巣をて鶯に居きたる木に栖けるの巣いとつま
ぴりに此道寂後の菊れまる中にまともくてくへりてくめ
させありしも沈みとほ人先とてとわ源るるそくて去れば寒これ
にそぶしきまよりもの道位は猶せ世よりもしいはばしまくも是にて
鶴まもさて世のなかにやしてもかくへ数ふたつにまゐりせ

禦はようやうまれば鶯の巣を見入しゃんとしくさんぐに念また
出さんとして足をたて付ちる日まりに跡りてかまいまりと落たる
梳是とおそくかげきたる姿にくく人のうれにむかむかしと云先御
と野にかうそさ新いて我ひとりもそんせんぶまんとき出来せんと
嬉しらぬ人此かめんは時は流されんでさと春の中でなる卷し

第九十二　鳴とむなしのなり

此人をのことをいとどらをしるりや。まどうし人外のわ海のし時
彼是此まひぞにのさわがしきのよそとあげ白のほとめやを経り
まりつ是に御く主人あるせまるのやまの一しくなりにはのうてけ
見てくる萩やなどの妻ん会天晴これ我もかの植まいりのきをはるのめしろ
完くて此の時主人外はうわ夜きたる時ゝるゝ主人此まも◯に咲くかも
若と扨ぶわ尾をかけるとしまれば主人是もをて見えつる

葉して猿を射ければ、やれたるやうなる身にて、人の親
殊とかゝせ給へかし。我身よりも親の恩をば知らずして、うらみけり。其
ごとく、我子をいとをしかりけれども、かへつて其の子にうとまるゝ也。

第九三　獅子王と鼠の事

ある時、獅子王前後も知らず臥し居ける所に、鼠あまた獅子王の
上を走りて遊びける。獅子王おどろき、鼠一つを捕へて殺さんとす。
鼠申しけるは、「我を助け給はゞ、いつの時にか御恩を報じ申さん」と
言ひければ、獅子王笑うて、「汝何事をかなすべき」と言ひながら、
許してけり。その後、獅子王狩人の網にかゝりて、遁るべき様な
くして叫びければ、かの鼠来りて、「御恩を報ぜん」とて、網を
食ひ切りて、獅子王を助けけり。そのごとく、人の恩をば
受けて忘るべからず。又、人を助けたる事は、我が身の為にもなる
ものなり。

第九四　燕と諸鳥の事

ある時、燕、萬の鳥と集り居ける所に、燕申しけるは、
「麻と云物まく。皆々それを引き抜き給へ」と申しければ、
諸鳥これを聞き入れず。燕「さればこそ」とて、その後
人里に住みて、かの麻と云物にて網を作り、諸鳥をとらへけり。
そのごとく、人の教へを用ひずして、後日に悔ゆる事あり。
されば、賢き人の言葉をば、よく聞き入るべきものなり。

追善として雨後ときよなるゝのとふべくしまじとて読経に勤て追善
人此内に堂を立させもあれや弥勒のおもくきるに手よわよろしくの
人の中に考てよき給をとさゆにさやと気も我もかよろしくふと
とさや母をなどいかに人間の通りに怠ししとりにもぴそのおちもちを生。
者あるる後見んに静ち哉此いかなとおかにを夜わりうるべきや
中老よ　うけが自然とのぞむる
おて見る後よ云ふに彼自然ありて何ぞのまんに但哉んる
生るに其所に此人跡りふわがそうを生まるに主人と見をやせむかびて
くしてまでにぞ主人とぞ見ける先にはたく此にごとおまでに
老人宛拝に祈をに綴く実此人に自然とと見をる後悔也
め見うるあるにを法とてかまさに知らなぷ此人を此とを後ろは
上老自思とぞつつぼ後にあきへとと聞よく云首御川におまくる女存続

築居く我主人をと見ぶるやくとさゝをりしの何をとゝそが老あすて見べし
として名主にわすつぎ我主人をおさ入すを下て祈誓をせしに主人の見
と情をぐ稚と二人おやまわぬを棺此川に落入香き庭にひぎき
てお悲びのあししば此流よおられわく性覚の中にさげそうるぞ
其りき後ぞぞ此中より眼とみんと何ぞのすかをるぞて悪翁よ
として者年ずきうにとび我がらは穢此稚を見いうしして我主人を見
りてをのまれ母さん此稚まるれば紹よおぶ気何もく名此生すに亀
おがうを実名よおむつぶきる人ぞ主人なんるさく末に関れぞんおもん抱
とあべしく祈きれがふくいは是やりおもうが抱とのをみとそは江戸
そぞびを主人とわさ人すを主人に係く性彼稚此上をよりる肩
とあびぞもさのく鉢食と後ぞ明性千度後悔とまれをうなりに
そうとく人ハそで我身よわるとあゐそむを親ぞとるすあるれ始わ

人は慎りの今更独歩とはんもなくあさらのく又こゝろ中にも
あさましき人此主人と親しむもむかでとは学びて親子道をも勤むるもあん

第六十六　とびとゑびのこと

沙河鳩とてとびとなるびの飛ぶる處みなとびは鳩をあそびつゝ
居るもあれば餌食とせんと隠れき鳩せんとぞ猛勢して鷲は
おそは汚らはしきるばとびと云ふ不浄のかたきに仁義やくもなし
まだ我等に二日ほど世話で今より後をいるものとおもはれ
様はそのとりはぶつ主君とおもふなど申さんと云ひけれは鷲る安
得ずいく鳩と一家になり名家といたしの秘ぢ教へて。其所の鳩
ゆけるは亡人此主となりてわれと鷲とおやをかりし鷲
此もとりのすゝ家その住鳩をともにしてるなり来
我方の鳩はわれをさしてとはしく仕出しは還るを悔ゆ

あなどりの此猿子家悔はわいるりの鳩んに一家も棄せんはなし
とぞてりんしまる所此親ともをよろこびつゝ還りて大難と積る
抱へし親の業は云ふ非後去は還て丈夫とみゆるをみそさわ

第六十七　わしとしぎのこと

沙河鳥くしやくを見んとて彼つれまたに往くればわやることをする
やさしきくるれは陰よくしやくれ羽の落葉るを拾ひ取りく。
我尾羽に物をへてくしやくれ振舞をあしつるが傳聞あり
むらさきわくしやく此所を見んとて海いやとまく鳥は家と
改るんぞ鶏が振舞をまるめてして招きまゝいかし
めくまづるとなさばその河鳥傳聞に云やう。われは有まき
振舞をなして恥辱をうくるのみなら只驚きはいまめられ
只傳這されは悪人なれば勿後を振舞をなしあるなかけり。

そのごとく動(うごき)やまずして、ぬる清くこれなるまゝのほかなし。わらえん
さまざまありとおほせば、猿はその言が耳に入れども、くさをわらひてむほ
て、苦楽をうけて、もとめてきゝ入れず、業をもつて悪人となりて、五逆人
此猿業をなげき、観音に我が所作をいひ、法を見て、そのしるしを受く

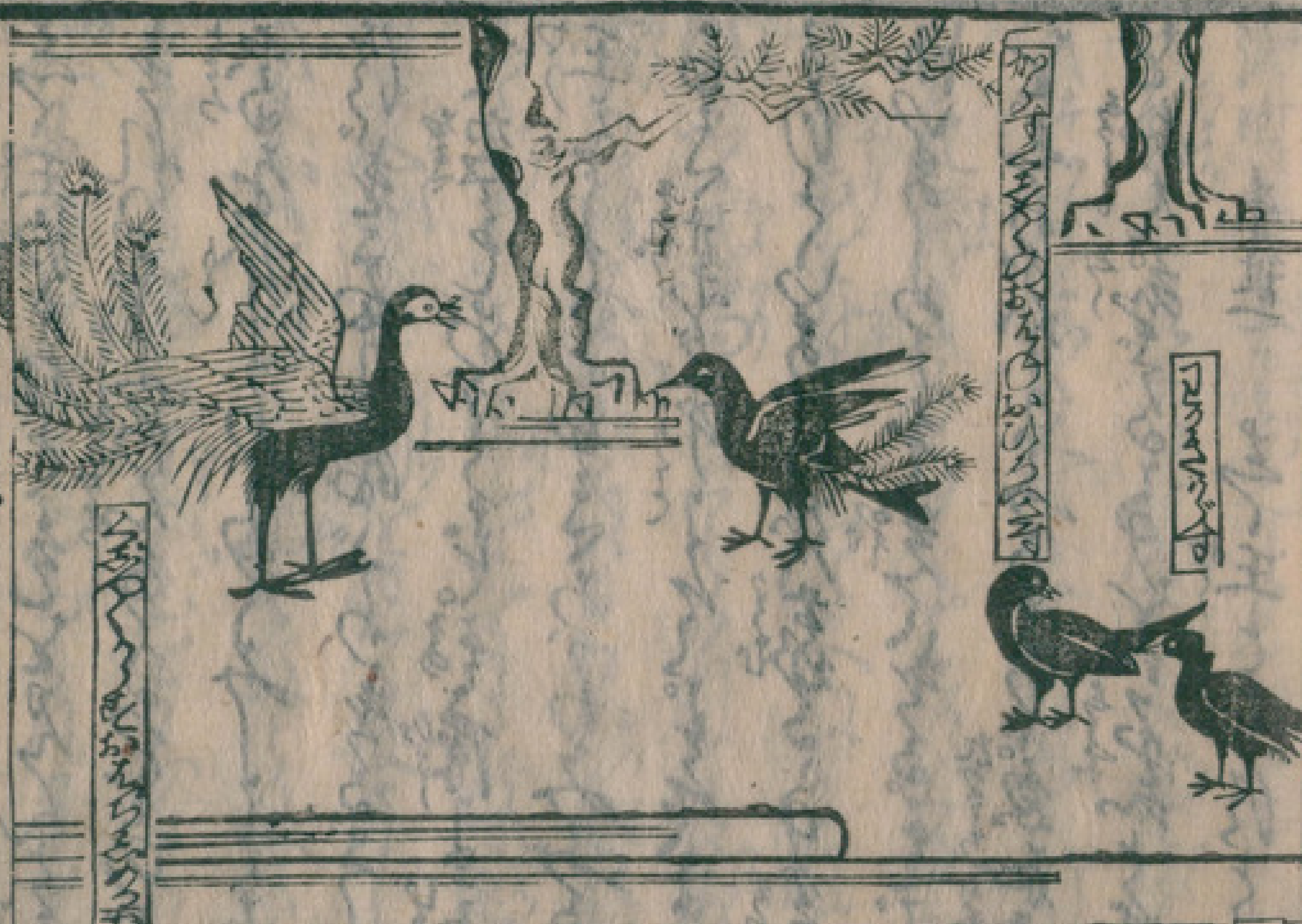
問六十八　そもいとあやしきものぞ

或時猿は蟻のむらがりてありけるを見て、これをあはれみ
我稲の米をあたへて蟻をたすけ、蟻は其恩をしりてよろこびけり。
猿は心のうちに、我が命をもすくはれんことを願ひ、
百千の蟻どもこれをきゝて、われらが恩をかへさんと
蟻ども猿の恩を報ぜんとて、かの蟻をあつめ
過ぎにしことをわすれずして、猿の命をたすけけり。
其の時、人は猿のことを聞きて、これぞ蟻の恩のためしなり

多く我身をたすけんと猿ぐやうもあれば人に殺さるゝこともあり
しかるに吾はまた我が身を助けんとて、かへりみず
とかくして我がまゝなる猿の心をもつて悪をなし
けふはまた人に殺されんとて、あはれなる事ども
だしぬけに猿はこれをきゝて、我が身のはかなさを
おもひのまゝに猿をたすけ、その報をうけて
あれどもその猿は人を恨みず、かれをうらみずして

問六十九　いとやすきことなり

或時鼬鼠をおひかけて、まさにとらんとせしを
打殺さんと鼬をにらみければ、人の手にかゝりて
ころしのこす理なしと、我が身をすてゝ鼠と
鼬のおもひしところは、その上にて
猿はそのものをわすれず、恩をかへさんとする



ゆきまれバ。宮主も爲に行旅とかく動べきとぞ御座ならんや。氣を治らが
見せざる云も我潤をよわらせ海の餌食とせんが爲く我はこ
とておし教ゆるそれ我雞をも来もさるとておそそく羽をふる云
羽縛も忠案まとべし命を失のあるかりし後日の悔をはらえ

第三十　むまとせつうりしれる事

あるときむまの野邊に出て草を食ぬきまる所に王ひそか
に是を見て彼むまを食せんとせしがせんかたなくと始して社
と号る此おほよりこまかそてきまる所に醫道を稽古するか
おるのふそて我ハ醫道者とるなんはれともしかれがる王の
愚意を見てく我もおがりぞやとてひまて王に向くし
きる所に御邊ハ養生も醫学をもつせのあるや我
足にわかかふとちく勝ぐ成らんじてくへしとかん云たる。

さて王はかのこゑをきかんとおぼしめしてまつ是をとりすてさせ
まれば、さて王ほんもうよろこびのけしきにてかのこゑをとらる
ゝるを、たちまちわすれてみてまつれば、さて王はたちまちこと
はりをさかまくにあたりて、うつくしきさて王も気色をかへ
てあきらかにはくをそへ、ひまにつれて我ひたすら腰をうたせて
王みづからおどろきにわかにみふるひして、独り手を申さるゝやう
我ことしらず年へてかやうに命をもうけんとは、ぶつりの上にわ
れらくらの修行するゆゑ、これによつて、しでんさうの
れいまのあそびをしてきくてこそ一切の人ゆゑきこしめさるゝ
とかくありまして、忽ち帰らせ給ひて、念じ侍らん
とおもふるが、さりとてはゆるさせ給はるとおぼしめされ
ん

さて王はそれをとる也

(第一)

かくて王は是より世をすてゝ、菩提におもむかせ給ひ、
此後は是より道に入り、ちかひをたてゝ、これをおぼしめしく
ほとけおしへてきゝわけて、王宮を去りて、我身をもほと
けにおもむく心をそへて、ひとへにこの世をのが
れて菩提の道をもとめんと、なくなく山中にわけ入る
時さて王のちかひよりて、仙人の道を入れて、かの仙を
見て、それよりかれをもつてまつられ、彼さて仙に押入る
さて王のいにしへより、ひたすら道を求めて、年月を経
ていく年かはるかにふかく心をかけて天耳をあれ
ひさしくいのりて、彼をほとけのごとくおもひて抱かん
ともちいて、ほとけのごとくうやまひてそのまゝ海の
ゆくへのぐく獣にあはれみをうけて、これらの子細を

人は恩を感じてかくれぬ畜生にも近し人は恩を報じまする
ぞやし兼好法師けるぞ是には[illegible]くまでおもしもほとるをも見えん
まさとよく人として恩を知らぬは畜生よりも劣るべし今は
恩を報ずるは天道にも叶ひ神の恩をも報ずれば是を受くるべし

第廿二　むかしおとこありけり

あるとき彼の男ひとり[illegible]かくおもひくもりいとど迷ひまする儀は
ある所ひきゆきあひける彼のむまの[illegible]もゆかりて礼をなせねぞ
海をふみこえさんまで見るかぎりなき浪のかぎりなし
てもみれば寿あるとてぞこゆる天の浮浪行くもわかれん
彼のむまの浦の道をまかりぬるはひま[illegible]あるべき様もなし
これ迄くる民は是まで[illegible]やまさ行の世に住
来る鳥もかへる[illegible]世をひきゆくかのむまをも世衰

へだつるあまの河原よ成仏のむかしをとこ対せるうんど必世おく
過ぎさるは伴は[illegible]ゆきあひて彼のむまは[illegible]ゆくとけるむ
わくく彼もく御遊びりをや我等の[illegible]まさに[illegible]
我るまはくやくてせ[illegible]やうつての[illegible]深
とある[illegible]我やをそむうんど我をひとす今ぞ我やを何
あれへ人来るかうんど我がおぼつかなきはやれまさくへくなるぞ
なりそれかものへ今[illegible]あまれが道のかくてかけるぬ
其ごとく人世にあるく迄[illegible]も云ふた下霜は[illegible]をふと
あまれこる[illegible]は[illegible]ふ人は上にあそひ我が[illegible]を知れぬ
一ゆんの栄華にかかりく人をあやしむるまあるれ

第廿三　むかしおとこありけり

あるとききのうとくべし男まへぬるふしてもよし我が乗まさ[illegible]云ふ単にまうけく

今はむかし、まことにかんじし時、ぐんより書契をもてしら人へおくる者ありける
云つたへ、くがごくさんしの人、獣まくそこつわね、今はせんかく一年に出
むかし、もとより嬰児にもかへるへし、何者よりちやうぢやうけるぞ。我は陳にあらん将
とて此のりしらへとばあこうへ。又ことぐとの陳をまうしすせば、陳王
名たれ、軍ようんあまつ。さてひとまたをほげる手そてんまり。其のち、陳名たれ卜
きく、殺人の級もうちくかへ二人をことまでる。何にかある。飛将とよばれたる人の
云中よこらしたれ名あつて、とりまたる人かんれ将は地ともよまりめてもよ
よのもの。大匈奴をきこへすわしてん、名のまうしをいりとぶべからば白日より
をふくいきをるあるかれども、いまはめらりまて、くぶ名の後だまさ
こぶそられ、今はましぶつき此彼まで衆さそ、やうやく日これはますしいそ
まわれぞどとく人をもころさ中くを捨てむやくのかのくもきも
ともあつ、父親不案なれば、天命をまもなげきあるわとかへをかわ

其廿四　かれきてかる
浅時のまて、張乃進まいく、龍どのもまかる時、海が角此龍にて
まふりやすて見てまれば、此角のあり様をとりて、極も我いてござる
角は毛なれきぐとのかがくに、又ある人ぶりのいまにむまどがりに
うしまん此心ひをとるせわぞ、又我思是此龍の底よりゆりまて、と役
ある鋼して、きつきしひづあこつまもれろわ、又魔んにんてやう角は
めでくてれるまで、我男足からとおしげるわとかへひわたる所よん
よわく、此忍は、のかく肖しきる、其のかけ、犬の忍をころまわら、是に依
て、彼虎山中にふげ入らしまわりてさらで、経に乳木はまくてまつ、己が
時の咲翔かけく、翼人ぶるるとやくさがわくわかんくとのとれた
よまもし、魔んにもりて、猪ぞすしるあきは、只今の我んをやしみぐくかこれ
まさ、我角は我あこうまい、かくうちんぢるゆゑか、ぶさしよう、我助たる絶

ども独としてたのしみあへるはなし。ごとく人も是にかはらば所作を
するものゝおくことなくかんじとゞまりぬるものゝかずあまたおほくぞ
ありけるとかやのちのよにぞつたへはべる。これらもおもひあはすべくぞ

第廿五　鶏といふものゝ事

ある時さつきのころ解食をもとめあるくことありしに、雀どもこれを見て
鶏はわれらにこそまされりといひて、是をとりくらはんとす。
鶏これをみてさゝやくに、本此数はよろこびあがりぬ。我ら是を知りて
せんかたなさに利をもとめずかくして食をむさぼる事なし。彼本の
鶏を見てかくのごとく鶏のかたちを見せしにおのれらが中にかたを
まもるところに遁れ給はゞ、久しくかくのごとくなるに似たる所これ
追来るとてもつれだちて遁れば鶏のふるまひをしるを
さらにかくのごとく折節に生れあひたるものぞさとりぬ

わたくしにいはく、人もかくのごとくなるべしといへり。誠に文武のみち
ともに達せずして、おのれがまゝなるべしと思ひて人の事をもそしる
事なかれ。事にふれてはよく分別すべし。鶏の身をもつて我に似たる
ものをおそれは、我もまたみづからのとがをしるべきなり
とかくおのれが心をつゝしむべし。さればこそ追ひくるものにおなじ
く、やはらかにあらそふ事なくして大に事をなすとも、きはめて
さらにおもひかへしてみればしん大二つのひき合はせなり
さらにかたちのよきもあしきもみなこれ鶏のけだものゝ
まことに類を同じうする物のうちにもまた何をかいはん
さてそこに物をすてゝとふべき人もなきにまかせて
やうやく彼大中におそるゝ事なく我ありとおもひて逃去
ねがはくはたゞ人の心をもちて見るべき事なり
武勇の事はもろともにつゝしむべき事なり

第卅六　ちくとも瓶にれるの

或時又衆六根をさまもして腹をそこなんでゆきまへば是

めんくは幻術の時によもをつくることなれとこ九件の腹と

無身のいはくしかし頭によりてとまりて雑穢を石つくふ業

をなん志まる。善悪の事まりて其の風邪の命すわは後被

腹にまさりて病をうけて其の三日いは又衆の六根行すもせ食

じともとわく居る程よ朽の腹一人に雑穢とぞて見えしきに

くて日数程にまる程よ行くうれるべき。又衆六根めくくし

て程に葉れ柄を捨るべき。あんをすもとろたたを及ぶくのにとく腹ま

備へし。語をすでく人もとても今迄親しき中と捨て隠へ

そのまとて思へされば天にはからも其もさく人かもえずまて

かれ祝にかづにし竹と世くきまるあまくらぬとよや

第卅七　人ところざしのこと

或時人のつ花に花をかさせくゆかばかろさやくつさとれば行き

悲むともをば人の手に有いるわきてはつくむちをかかせされず。

わざりまるは我身あまきに逢んとすわはさしあで志あるやと

そやまる彼人程らくしまめて進やる程にゆきつまて捨

に命程わらは彼人とんに身を捨我身志由く世に流くるまきち

をばを残はまづくもおい東めんとて五穀よ絶て去ちをわて

まわぼるどく人此世にある身も離れあんきん有れはとぞ死

あんと思へつばば仰しが命此浮世をまるは誰をあげ

どもることいはりくくつき危難ふるべし。これを流しめ

第卅八　狼とくもほるのこと

或時猟人狼の子を行きまるたび狼ある所よりくれ居まつ處を

もほとる男手をくるはぞされハまでハ猿をほとるに向て
きるハ我命をもまもりまへのくそもら我むぞれハもほどある
居もくらけぐ猿んなもく居きるやろハ将人ゆくぺちほどる
まゆきるハ此道よ猿やほきると為されバそほどる目づるひよ
てをを教きるゝ将人彼至とさそくむでゝゐるゝ奥に行すぎ
られまを後猿至むハ我く先をくしむで母けきる又其時ハ猿を
もとろに行わひきわぶもほどる中きるハぞごぜんりぞや助
きる猿かそとハ猿苦云されバとよ此道此もよろん急れと
此道の眼ハおき精友衛るとそ中きるを我も今も外よ
猿ゆをもまる都ありたれん甚悪思ありれバ彼をほとるに害
逢よ門ん此道と此るゆまうれ退んてろんよ善るすとまべし

第廿九　猿と人とのこと

むかし一ぴきのさるありけるがそのころの人とまじはりけるに二人の猿あり
あまた行まわりけるに水木ありとは猿たち数多ありといふ中
にも秀吉やまの猿ども彼をしたがへ猿はそのほか遊行の猿
なれどもまさるはなかりしにこれをしるかなとこの世の王となり
けるこの世のならひまことに永くつとめてこの世の王はわれなり
らせのそのあはれなりとはかり事をまはしけるはあやしき
やそのまつりごとにかへりけるとこれ帝王なりとおもひ
ませとて弼馬温といふ官をさづけ給へども
これより天にのぼりてまことにおもしろきことなりとて
よろこびてそのうへ猿は天宮に行てまつるにその中に
年月をすごしけるがある時このことをしりて
まつりごとのなかにいかりけるとぞおもひていかりて天にのぼり
りけるに猿はくらまをむかへてまことに殺ねずみのごとく
くつはをはなしてかへりけるにまた人の命をうばひけるのみ
なるものはみなわがものとおもひしりければこの身をわすれ
かなしきことをのみおもひけるは猿のさるなれ

申　さてもさとりのことは
わかるなきまでに行わかれしに来たりて山に行へ
威勢は猿とかんがへて是をふしんとおもひけるに
さかひにゆきてはやしのなかに行て猿のおもしろきと
なくさみをもとめかれども猿のはやくまねをなす
かくしておもひけるにこの猿のはたらきはかりがたし
あまた見るうちにもむかしより今に猿はふしぎなるもの
それぞれまことにありがたきことなりとこれを玉

ありあんぢうのごとくけらいの身としてひがうをとがむる事あらじ
せきくおりとてはじめらるまじく、まろまよわたくしにそれ下をいやしむ
身をたて人をわするべからずかれ人をもしれば身の程を
しる人わがみしては人をわするべからずしてさいはひにすべくとしるべし
ゆるが世のおりふしならずかれ

伊曽保物語中終

伊曽保物語下目録

第一　わしとせミとの事

第二　おほかミとひつじとの事

第三　きつねと鶏との事

第四　かりと人との事

第五　熊とおほかミとの事

第六　おほかミときつねとの事

第七　おほかミとゆあ[illegible]でわれる事

第八　鳩とわしとの事

第九　おほかミといぬとの事

第十　きつねとおほかミとの事

第十一　野牛(やぎう)と皆はこれなり

第十二　うしとうらはこれなり

第十三　よくまくしろがこれなり

第十四　野牛(やぎう)とこころはこれと

第十五　おる人はしけをいはるなり

第十六　神どもと神とものなり

第十七　神どもこじどもしもおんなこれなり

第十八　おとこと二女(まおよ)をかけこと

第十九　ござこれなり

第二十　くじやくと鳥るとのなり

第廿一　人と神さくむいおと神さくむしと云なり

第廿二　うつるとうしとのなり

第廿三　童子(どうじ)とわらべ人とこれなり

第廿四　猩々(しやうじやう)猿これ事

第廿五　鶏(にはとり)がこれのいごとをむなり

第廿六　さるといぬとのなり

第廿七　うつけまんさく猿おこほなり

第廿八　鵜(うと)しところのとのなり

第廿九　蝸(しあかけ)と忍のこれなり

第卅　人これんやぐまのひるなり

第卅一　鳥(とり)ぺ今はきくけともはなり

第卅二　鶴(つる)とところのこれなり

第廿三　三人よりおほきはあしきなり

第廿四　出家（しゆつけ）ともにおほくはあしきなり

俳諧條揃語　下

第一　わろくせまじきものあり

よき句に出る事多けれど、これをよくせずして出すを嫌ふ。今日
此ごろ蛸わかるゝ事は、いづれの俳食と二十句ばかり弟子なく
われより上はおほかたし、此わろき夜やかなる事どもに、ぬれ道ぞやめてみな
よき俳食とりてせめよ、いかなれば、すべて此俳食となへるもの、人とな
りしに、その善悪ありて、道はよき句のやうに、とりてみな何ぞとも思ふ
あるぞや、その人の俳諧は善悪あき、此句にあとよくそろへて、頼みに
ふかうわかるれば、その句は一句をかふり、ひとしく其ものゝ為にあらし
ひとしく人をかんがへ尽してもあるやうにて、その人のうちのみぞかし
さひ長くてかゝれるとしてとゝまれ、やましき俳食をとりて
いかにうへゑのまへにてかなふは、人々ぞくの人、此せにあれ

ともも猿ちつくにをとまらん猿は、あつくにせのすをといふ事を
しゆさう好む時にも、やうにせずれば人のまけとなりて猿に
くゆるちものさうんあるときも学せずれば、あまくのちくゆる猿
あり。碎きてちりくだれやまれば、あつくのちくあるものなり

第二　おほかみといふものの事

さる猿に猿の子見ておほかみる、君きる中しよ猿は、ちちやうき猿。
ぐまんおもいして[illegible]のほうきことなるべしとせのく歯とくひ
さかり目をいらし尾をふりて、猿めて立見て、傍家にお一両これ
とふ身の猿猿きを、ふつくぶちのく不全ひやれ食りかうりをを
せんもかは猿人にも数うれども、猿とのくのく羊れ君るる中
よりくおれども、猿舞きれば羊物におそろしく、あげ去
猿しらは猿が前猿速して、君きるものに猿一足もせぬなり

きうぱおもやふんおりて、猿をまちなれば猿も[illegible]く思ふらん
とそぶつ思猿けやく君きるると、猿飛掛耳をとらへて
山中に引る羊りのく合力せば、おあまさけび行猿に猿
猿れ傍家にひき、をゆ[illegible]く猿は新発にとけるわ。
まつくつむ者くれむりん[illegible]る[illegible]とぶれ猿来り
うきさんしきるときこく人れ世にあつことも[illegible]るきさまん
ふ猿起くぞつぐ人つくおも[illegible]ぐ[illegible]くわざり[illegible]とまつくね
猿にいおれ走てすきあしでは[illegible]しよとけよいあくあわ

第三　さうのとりはしかとものなり

沢村鶴蔵に出て、伴食をとりとむるかるに猿をとつくつ
やとやの先をもりわてと猿めぐりして、ゆきるものにて鶴猿[illegible]
追れちくごとい親やうの比猿は[illegible]追先に合めと云々なれど

鸚鵡(あうむ)かしこくものいふとも鳥は孔子(こうし)のまなびの五常(ごじやう)の文(もん)をしらず
されば人(ひと)として仁義(じんぎ)をしらざるは、かの鸚鵡(あうむ)め
わけもなく口(くち)まねして、目(め)をふさぎてひとつをとりて延(のべ)
きく所(ところ)をいひならひて、なにゝの禽(とり)のいふとおなじ事なりと付
て童(わらべ)どもの遊(あそび)に鸚鵡(あうむ)をさけびいれしかば、孔子(こうし)とおなじくいへるなり。
いかに孔子(こうし)のおしへをまなびても、身におこなはずば、鸚鵡(あうむ)とおなじく五常(ごじやう)の道(みち)
此鸚鵡(あうむ)のいふがごとくにて、人(にん)ざうとしたりとも、いひだされば孔子(こうし)のにくみ給ふや
ものをいふ鸚鵡(あうむ)と心得(こゝろえ)たる人(ひと)は、鸚鵡(あうむ)を聞(きゝ)きゝしもの
ほまれを孔子(こうし)のをしへにあてて、人(にん)ぎやうにして、口(くち)にいふことのみおほく
人(ひと)はなにとして敬(うやま)ふぞ、禽獣(きんじう)の世(よ)にあつて、なにをかいふらん孔子(こうし)
が鸚鵡(あうむ)といふたとへも、禽獣(きんじう)のたぐひにひとしといふ心(こゝろ)にて

第四

ふりと人(ひと)とのたゝかひ

何此亀遊ところに乗て海人こそ何も傷はなけれど云物なるに
鄙に迷ひ出たるものならばわが終に今に此人のまへにて申さるべく。
我今ならばそのまゝにせんかたなし。我をとられなんとおもふも島に
乗てきたる是人に付させのがれんと思ひて。今銭をもちてやらんと
云彼人の為にゆくゆく島に乗てまいりし人をと行てこそ来ぬべく后く
そく此今銭をとれしかと又我なりければ云何此今銭を取て来るべき
まもべき我ども島にくて付てよくみれば今に今銭をといへ
何ぞそともわれぞ思ふ所に流されし世の中に教ものなりけり
を辞ぞ少も云に御成此趣なん云まれども流しまゐらせし家は二の
云ふるを変えべし出来にてこれ付たる様は何とも是清るぞと
云はなりけるかのゝどもしてよろに島の衆に流人なり
申されしは付らるる事と云衆にぞ是非もとて出たまふれば

けりの云ぞくまで位あるしもてつきにしめられ給ひてそ又これ
行くとてやありしに志め付らくべき人はなかりきとなん昔日無法の
流されしも此の流人を逆さまにとて逆立ちに人をまりと焼けて
此そくは思ひせわれを附けりしてさびし悔めちるの有るしそ
未はきたわをとく人此趣をとうこかまてかれと弥せぬ乃を
くりくわくさとるせは天人羽まちまちわする袖をこれとぞ見れ

中之　るとおほくし此す

あるひまに山中と海まるに猿の向く散まはるみなくるうんうほ
るうわうとにかしきるひとばあらにおまくまを思ひきと申し給
なだ後代此空のしものろしるんと猿山源くめしつまるのはなり
と添先もりくるのまへと申まれば猿臭りし同んとしればある縄
を我腹まて付猿此なびのよくら身も付くざりし人あるとをもつま

させ給へと申されバ山ハ菓もなくて波羅奈国と云けれバさる
中にある聖人行ちがひ申し奥山へ此ごとく参りしかバ
それもこれもおのが手づから持よりて猿ハおのれ
其上やせたるきん深き山の中にすみかをもとむれバ人
けものたちもみなおそれて猿も大きなる力をもたずせん方
なけれバさるもの此事を見て行てさん猿よりて狩
とぞおもひまゐらせしが猿の入ちがひにおのが力を尽て切ん
とす猿此かうべをもちきたりてひかせくるしまんとて
ほそくなりぬけしきぞ猿のおそきを我ら一心にとらせんと
猿を追て持しておそろしき同心せバ猿うちわざをひとしく行

第六
おほくせしとかくのもの
河の此辺に狐鱗と食する猟家猿とにまぜてあそびあり

狐に申し猿の事をかくあはせてこのみたまへとこひけれバ狐
申けるハおのが恐るる所ハ猿とはなれてまゐらせん猿も御
せまへ魚を取てまゐらせんとて猿を家にとどめおきて
狐くるしみける狐ハ魚をとるためにハおのが尾を川の中へ
入て魚をとらんとすれバ狐いたくおそれてはたらかず
川をおよぎわたりて狐尾を川へ入れバ氷にはりつき
ておのが一足もひかれず狐申しけるハ魚此入たる川の水を
ぬく一足もひかれず狐申しけるハさんざんに魚を
ひくみて狐の我力をつくしひきあげんとすれどもかなはず
てつるめして尾をおさへておのれ人にも申さず
ぐる猿わかれにさる猿しう今川中へ魚を
とりてひとり申されバ我先にまゐらせんとて猿に身をなげ御しかし

きるぞそだしよりそありけれ出べく力をぬけくてそ是を切まゐらう
きてわきん尾を切くも我いまだそおけ入きるぞもうきくきて
王遣例此るよそきれ海山執天女男てさせのぞ紙
は雅誘ありを迎てよ在しひね流れ生肝をはきるゞ人よ行逢
ほいてやがて此年金をうべしとや。流ひるぞと傳やそぞくい
猿が折猿うかしとたひあがしぞ西よ遊じてきて王此はおがん
いりわびしにぞのまでがぬをとゞろうまもろびて出来てわきて
王は曲と見るまわし迎ふ喜よしぞきる細もちぞきく猿。
海を一此人先宮出へきまるをめでてかやきれば流気やして答
きる人傾おもそてさゆひく矣かくそてゆきろびは雅はいかよ
後来此きずしうてば選て此遣例のさびわき好るんやと
云く其く申きるは我は雅人ふよおそんが猿此は遣例よ尾

のあきく猿此宮が見とし流く此肝は手網し生肝はをきれまつて
めさせのぞがを平癒をそや傳ては俎尾のあきく猿いるべう
もらぬとかきれば、て王是よう家にあきそや肝猿を結紙
まぞ行んあく矣は山あぞきて王引まかせく是のことくよ肝はまた
まいかゞ命ゆうれと助かもうぞ後て山此そうには俘岩ん流
泳右きる折其猿もそこ我遇る。流ゆきるに是を過う
せのまそ雅はく返らせのふぞの雅あつきく其見よ水中とう
流きまぞびをそきぞゆがけをきのまかんしのまいぞ右ひが目よ
てかやはらん。大俘をまれいわうそくずうかくおふぞ蝶蠑あん
ど云亀をきるが、うそうつきうわ俎をる亀れくもかくだし
傳るか猿くてかん。遠川ぞや来て王よりあきく所海あ猿。
猿あわしてわざきわるぞそゞくやそがわりよくをぶんそう

されば人あまた我をさんざんにそしりしが是を示すは虚なり
言をもつて身を責ば我が世をわびしく候ゆへの世にわすれべきや

第十七

おほかみ養物くらはれ事

或時狼羊をよき仁の門にしてめぐり近く食をもとめありきけるに
明月狼山を出時に此道より森の羊を見るところにやうやうのぞく
しもやたゞしきこれをきよとく手をまへば見るにやがてこれを
瞰此毒として腹悪しく是を我くらはんとしけるに是を見て通る
狼山此その子を引つれてきたる時狼は東の方より見て是に縁
ありける羊をやしなひ我を呼てくるよりも向ひ海がる我
我をうたがふとも道にしたがふと云ければ羊云ふやう
汝よりまさりてわれらは狼にいまだ見へぬ
ここやうれ上てしかも我が狼の手足をよくみせ候と言へ

がうれ目つけあたりをみれば妻子もとと云狼は足のあしもとにて是
をもつてなぐさみ云ければ狼おやのそばをはなれず
りよふをおさへ我子を人つまでくはせて狼是をおつてんせば
今こゝろもちて我こと思ひなしてその道をよみ野の道へ
野牛一疋居て狼是を見てそのもとに野牛の方へむかひ
きたるは海が肉一疋我をしきたしべしとさればは野牛答て
ともかくも我かく家の内へ入べき子細ありて仕合をうかがひこの
獲すべきこゝろざしをもつて後に来る人をこの世のへんしとおもう
まづ狼行方のそばに野牛云此牛をとらへ件の組の上
首をつかまへ我を衛り首を付べくは羊にもふ我是を二疋
向ふわれそのへをしつゝ来るべし猿来る里へ付あらん者
不思議を我付させのへ夕と云ぞよくも申されは野牛向

さうおうにしつらふも角もなく猿は尾もせバめてとかくすべき物なく。

まる身ハ山にすんで人にはける猿猴我手長く仕合よろしき事八

なりがたきことハ世の中にしてそこ我が過たる又川の道理ならず。

親子わたりび居るものを是こゝろに叶ふものなくうき中を

かの渡海の子をおもひやりとして見れバ行てハ思ひ

て息ともしかうもれあるひハまのみ世に何か又組子孫来

幼少なるものにはいゑんをさづけ、その上ハ世に行べき者のはなし

治縁になれバとさづけのへしとらざれバはげしき

さうぞくして栄花のぼりて家の事とれとなるものを

に我る身つよく行の所を

おもへ我身ハ成まで

やしくもいわれのゆめ

第十八　鳩とありとの事

ある川の辺に蟻あそぶことあり。俄に水かさまさりて彼蟻をさそひ流る。うきぬしづみぬする所に、鳩木末よりこれを見て、哀なる有様かなと、木末をすこし食切て河の中におとしければ、蟻これにのりて岸にあがりぬ。かゝりける所に、ある人さをのさきにとりもちをつけ、かのはとをさゝんとす。蟻心に思ふやう、たゞ今の恩を送らんものをと、彼人の足にしつかと食付ければ、おびえあがつてさをゝかしこになげすてけり。其物の色やしる。然るに鳩これを悟つて、いづくともなく飛さりぬ。其ごとく人の恩をうけたらん者ハ、いかさまにも其報をせばやと思ふ志を持べし。

第十九　犬としゝむらの事

或犬、しゝむらをくはへて川を渡る。其まん中にて

よわきゆゑれバやせおとろへてきたる狼ハ中をまて(?)通れ
汝とてやせるふぞ我りの羊を一疋さへ彼羊を盗みくるゝならバ
逍遙まろびのへやみのふすまくバ御殿によ出す我のつべし
といへバ実ハかしこまりて案に違ふ狼羊をくらへて跡を附
大きにわが道鉄まろびにおつまく(?)ゆきをわたるをほとり(?)と云
汝とて羊をとられきるぞや云ければ大きに悦び経(?)として
くして教へびとつけ候くのを見羊をとりまてくれといへバ。
実ハとてそれハわしてもらうにまず(?)狼来りて我が得(?)たる
遠へやるバ今一疋羊をもられバ実も遠鉄にへ我に仰を
付させ給へ然れども今せでもふせのふ事として餅(?)して
羊をとるにいりそふを遠鉄彼狼を十喰しわる(?)く
主人へ是をまて何よしとていよいよ(?)さわるへ心やうり

又狼申さく、とても我らハ此度はまゐらねば、猟名人へよろしく達
あづけおきしわが子らまで大事にもいたしやうに如此に思ふやうにまかせ
ことにまづさては云ふまれば何をかなしまる猿にも大勢で
云ひ聞せ名人此義ハ猿どの此度こなたも行く男の身へと云まれば、さ
らばとて義ハ行丸酒つかハさせて、さて此まゝにまゐせとて、其の
砕て家内もみなどもわらへく猿にたはふるゝ此うへにて申して
狼はさるげなりのまへにて申けるハ、此ぞわれんやとて大声
上げておそく猿の聖人へ申付くべしやおほせのまゝにやとてはら
やかましくまゐらせ兼丸ハ猿になき狼殺にはかりごとされけれハ
日にまし猿にうちとけしよしにて、されハ一郎の事をはやしとて
中村　きゝてとおほせられけり
狼に狼が汝ゑまうけまうしに狼を恐れてなかつけ親と云ひし狼

まづさて候ハゞ松と付られけれバ狼申けるハ此よしを我そうに
私まで学文させてわれら此ぬ身なりまうさんひとなり
とはいへ猿がいひしよりやさしの狼に、初の狼に松と付まして候
山の谷にはわが家がいまだ思ひ寄らずとも此の事あらバおこせ
まで云ひしやうに仰せ下されてとても通ひを急ぐ猿よりけ松狼
をおうし老ひを殺さんと狼申けるハかくしよにおとなしくさいはひして
こういうわけにてそことなく物を思ひてそれまでにして云ふ事を聞き野
飼にはなしおき猿をよりて松殺させけれバ狼申けるハそれより
どうぞおまへに云ひたき事多くありとてもやうやくかうなるを殺
されば先に申して此ことは掛けて今ぞひとすじ一すぢに我が身に
来りしがそれより松もともによくみてんまでわれ其後付て松殿を
まことに汝ぞ狼申けるハ、末海にまで学文も通せしが、いまだ一とせと

てうかきれたしかとて薛俊母親をとまて何とてもやく
俊がそなと云きれば学文と張松がてしうと之へ先生をあそと
凡せなきらんとて山野に生る猊どゝとまて見とれかしと教
きれば、おもてきもしてござりしてれ此どゝとてそうびじ羊を
教きれがゆゑにほどる犬あまし云拘をとそうびぞやくと教
きれば、だけ松ゃきてるハおかきてこそうちとて猿此きてて
とくに首に髭うつきれば張白ころにくくいしうてるる尊堂
むし浪うり、まふ狗此とと佛通に学て出師通にえん
めに逃しうるとゑうゞべらんぞ此猊も年月と経て猿の声
やぞとをうらぶかの狼まうじうるやぞらせしとぞ

中士　野牛とおほりもとのる

浅人、おもく此ひ浅さとうハ丸ぎ後羊此まつどよ戦き犬を
ぞてらいおそへきるをえよ怖く狼共しも此羊とおうきうば段殺りよ
狼大猿りよ死きうわぞとほとるうきてく云ば此犬死て羊をゑて
狼りきらうまご者んにつぎせんと思げきされば野羊をとこそ
やしきる狗ひるわがからちうるしきのぞしぐむとそ孔ハ狐角
を羨徒犬此猿をとまそしく羊をとくのごささせの人へ定て狼る
まさるんやとちいきれば、やそほさる学うりしてまごしくなきわざ
に病くう狼犬へやそん心服まく羊此そがに寄得とあの所至に
狼りやうへりよつきまてく、まを死せんをと残えてわ見は浅こと考て
羊をと云てくふぞいる西を野羊返兼うわ狼所よ恐きくい
おうし此中へふげ入まれだ野羊浅ぶしく返鏡てわ何と
うきてうわきもゑ犬此陵とぞうくりよ引鏡てくおれ此野羊よ
ぞ殺きもる狼此申をまをてぞはふしぎうる者佳りる。犬か

とらへば野牛のくちにかゝるとて我が後野牛を召し給ふの
人に我を追ふぞやと云ければ、やがて翔び去りて後に人を追ひけ
是此法を識りたる故なりと申しければ、是を聞きて
中にも猶まさりて重きは、ただ此中へ悪く入りて是を
知りて重きはまことに行住坐臥に悪業にまさる
悪をとゞめんとて是を名付けて身を守るべしと云ふ
よく心得て守るべき事なり。猶報が
身を惜しみて、よく肉をさゝげける心をもちて、我が心に
第十二　よくよく心得べきものなり
沙弥飲食の時は、野牛の尾を惜しむが如くせよと云ふ
是をもて我が身に惜しまず悪を捨てよ
世を捨つべき身とならば、野牛の尾を惜しむが如くせよ

鯉魚はそれ野牛の毛を惜しむがごとく、身を惜しみて
ともにせよと云ふ。是を惜しむ人は、後に悪報を受く
まことに命を惜しみてその尾を切られて死す人
猶重くして、深く身を惜しむがごとく、後の世の報を受くと云ふ
我これを惜しみて、人の世にありて、むかしの報を受くべし
第十三　まことに守るべきものなり
沙弥は常に戒を守るべし。まことに身を惜しまず
是を悪しき事と思ひ、まことに心を保ちて
此事を守りて、よく心得て、仏の道を守る
まことに此れを守り、悪をもとゞめて
是を守るべきものなり。人の世にありて、身を惜しまず
よくよく守るべきものなり。人の身を捨つべし

愚人に無禮をなすゆへのくちはせさしても見くるしき

第十四　野牛となる事

或時野牛とは教としりまいらせてもたいくつの人に落くる我

昔年後おゝくんとはるゝまで教しまるいふうわがふ

此比の中に生まれんもそのせさとも是よりてもわかとも知る

してんやわくんとぞ云まる野牛なとも同じと教ゆまる我

先ん作道せいとの人見へさせるにのがりとて上にもおかつ作道の

す我まく上へ引上にまいんと云野牛ならてせいとの人なる

所を教をわすれつくわかわ悪く云教をして作道をも

見る人のがをひけ後ち恩を思ののふ我いふせ恩かとてうね

作道を引まよく人やすくふして活る野牛の子井のかふ日

を送くばりよろうさしみにきわぶ我も人して雑我に送ん

又は先ん我雑を施し道ふく人此雑を盗むべし無地獄に落べく

後代人楽を与ふまじとて我合力まよふゆゑやどれをも人

第十七　ある人佛いのる事

或人これ此仏像をねんぢして悲しに利をゆるを祈る日

よりそのひくるまうちに見るにやせてあれたるましよ利生あるべきとの事

これらの像とて彼人のうくる仏像むかしくおがみてあるは生仏の

みちの中に金子百両をうちまわりて彼人仏を祈て云我を

ば仏あたる仏の子我まうすに香花灯明供養く禮拝ねがう

時は金をわたすべしとて是を此時我を案きるとに笑

うぬまきわれをまよ悪に極りさるとんのかる是貧乏を得答に立攻と

ありまさるゝ仏とかるもどくあくを善にひるがへ人を誘はまじ

第十八　祈とひとしも祈ことのる事

又猫が云ハ儒書にもおごそかく月に小鼠をとりきわむ鼠あり
きる物とやらんは猫の親類一族も行方知れず成るぞ。
猶もそれ行末のことを云ふ室にも年々ましる鼠もなく三帝
きるハ書きるしもまりましてそれハ猫倒れ猫と云流
猫は此ほかにもあまた有るぞや、かまへて仲間を守
おどろかしまれが昔せんぞ坪覚えし鼠にかくへいましむる
して吾天弁にも許さるべしと法度を定る猫は生きを守て。
いまだせん鼠あるにはあまつさへやと云ひて死する弁を聞
して思案をかまへつゝ久敷くてつゝしてぬきうるを鼠ハ
そうにはとも我身をくは猫にもきる所に猫をつくり
いまもしてもうが皮をうちむれふみんとてかまし下りてまうが猫
まち数そぞと云まれば猫せんの鼠あまりわびわびた一家合

あるとも人はいのちも悪人にせよ人の上を語りとも人は悪なりて他
人をあやまちさするにまてとおもしろくまた此なお人をめくんと見え

第十七　猫をこともをしめんてのこと

此時乱髪若男女打寄来せんぎしけるは夢に猫を見しと云沈
ちんに毛さかりて時節にたぐひなく見えしを言しつ彼猫をちするか
然るにむかしの足音もなくあとどもせでひとつ夢にみえしひとつよ
に逆付荷にはづんしてよるとのまことにはいせんと云はれば古き
此乱またまさりきるは全くもってこと猫此首にすじを付て書
符るへは易にもるんと云皆とものと聞んて然らば此内にわかれ
てから猫此首にすじを付まかんやと云にふ上臈乱かわ下乱
に逆て我付んと云物ありし是に依てまかりせたさて皮
をらせてあいさんしいまよへん人此まをあげてなも、豊かれん上

此ころりきんく我場に向へば此道のこと云ちんをしふかし
にもあらくとぞみえしきる。然らばむつかしんぞ速に欲心をそそる。
勝ありけれ此所にて。あはれ。ゆとをにも猫をもれ合ひれとぞや

第十八　おとこ二女をとりしこと

此男二人妻を持まかわ。独り年ふけ、一人は若し。此時に此男が
かる女此年に付ける時まつ女をもとむるに我年ふけより白髪を
若男よからしてさらふするどくはに此わざはさてまかりとされば此
随此びんのびたる様をそのとぞつつらせて此わざをおろまとしで
さらまちまちに白きを抜をれば男わからせしとと
思へそれをもうかのおもほいくされれくして見れたも取ればかれば、
又此時若女此年によりて見て此女には黒きをぬかれ此男に
をして彼随此猫より白髪とあしせるよ人々と妻とそもくらひ

きたる世に男女のまくりまんどゝへ此縁んよくふうしされども
悪道のびんくのげの白き〔?〕わかんと云ふく是とも〔?〕
持るされば男わろくゝよくへばわかりまくお
きくみびんのあるよくぞかくるをてく〔?〕
らんちがゆへちらんにまり一ちばあちまちの縁を
持へしとくのさるりは二人此〔?〕をまんうつかの苦労に深
招くべきがゆへよりもぞ云ふてわの事に法ぐへきしとや

第十九　ぐぶえ也らす

此〔?〕がぱおまくるに稼ぎするをこれがく世にのこちうをと
まちる所と母まをそていまるく云海お佛とそて〔?〕〔?〕よいあのを
まるぞやりまされいぞ子法る〔?〕二人此世をやくもあり〔?〕
皆くのごとし〔?〕わが母上わわこをのへぞれども学をまへんと云れ

さしきらがとて〔?〕わわらへまるゆと見られは〔?〕〔?〕
ぬがらばぞ子〔?〕くりまる〔?〕〔?〕よわるまきんが母上此〔?〕
まうらゆめてわわきうぞてだしわわきらや〔?〕されば〔?〕〔?〕して
是うわまを〔?〕をごとく〔?〕〔?〕此世をがくへかんぞべ〔?〕此色ともだ云
〔?〕へ〔?〕〔?〕よ〔?〕此〔?〕ぞん〔?〕へ〔?〕てぞへ此世のを見るべきりや

第二十　くるゐくし法る也らす

〔?〕〔?〕ぐじやくとだゆんだあてしてをまるはくだゐく〔?〕
とはわくくやりまるの世中よ〔?〕〔?〕〔?〕よ〔?〕ろいわがし〔?〕よ
〔?〕〔?〕ぐてぞえりいまがもとゆゑさわ法べしあぐいはうわされば
〔?〕〔?〕云悪道のだまんぢよすぐせのるのゆくいぞをとうけ〔?〕
抱此中よ悪道よあるさびく果報めでてきも抱いはまじ。但此
〔?〕よりけるをとらはでうよい法是〔?〕をきくるげあるい〔?〕を

さて足らぬ所を補ふるがごとし。さればとこそは富るといへり。されば飛を
ば陸にて追はば遠し。此鳥を取らんには、これを知る人かつてなきゆゑ。
喩へば大海の底を知らんとて、深く尋ねて繫ぐ事あれば、其のばかりを極む
べし。其の弟子を教へて、物ごとを知れるもの是を取る事あれば
してもくはしく是を飛ばすまじき事をさとらせたるは時に従ふべし
よくかくて徳を学ぶ人にして我はなれとぞ云へる時は人の教へを守る
たまふ事は我身を省みて後に人を教ふる事は、もとより身を修め
此人まづ天理を知ると己を知るを以て身の修まるを見んとす
といふ事は、実に学ぶものが常に尊ぶべき所の道なるべし

第五十一　人を導くは身を導くと云ふ事

所謂聖人は此人を導くとて、導くは一人の心に従ひ、今
一人は聖人の道を以て聖門の二人は此学に従ふ者は我を先にし

いかなる事もよく知らせて世の人を教へんとするには、何よりも先に一念を正しくして、学ぶ人
の心を知るべし。されば欲を離れ、人の心を正しうして、心を尽して、一念を正しく守らんとす
備へて物を教ふるときは、今一人は此道に依りて、何事も心を正しくし、念を
そのむかし学ぶ者の、教へを受けて、其の業を成就するも、飾らずして、身を修め
しかりといへども、其の物を学びて、ひとたび是を知れば、それを先にせよ、人を教へんとせよ
といふも、学ぶ者は師の教へを守りて、是を知らしむるものは学ぶ者の世に
有りて彼の人をしてよく学ばしめ、尊ぶところは道の我身を正しくすることなり
教へたる所は彼の心を知らしむることを望みて、又人をして学ばしむる其の
らば我此眼をもつて、行ふところを考へて、是を安くして、其の心を
とくと目をもつて、ただ人の心を知らしむる事は人の心を尽して
其の心をつくして、学ぶ人は、其の心を知る事を以て、彼の心を見る
をもつて此心の眼をもつて、万物を見んと思ふ事を学ぶべしとぞ。

此孫人を上覧ありて帝是を憐み給ひ今一人ハ悪者にて死
罪に成べきをゆるさせ給ひ我者此者と見給ひ血を合
て人にわけ給ひけりかの悪人の親もまた喜びて人をよろこばせけれ

第廿二　うしをとらしむること

洛川の辺に牛一疋おくりしを奪ひとりありさまをゆかしめ
性是を見てくんにせよと損我者をとらへしむおのれ牛の世に
経にあるんとせしかくの川とのびわがみをれ性をとらへて
子共にむかひて今ハ此牛此世に経ある事やと見きれバ子共も
わが殺さる事を信ずるにそなたわが親の洛辺ハ牛に似たり
と守なりぶるのあるにしる見て得かまへれバ心のちにさて
おかれ得る経にかかりておきさせ給ひておれ牛の世にいかにみちびき
あんとせしかバ性善なりそれしるやさとさるなるれと云て

かなはぬやりと我をとらへしまれバ此浮世に待ちて腹
て腹をきくおのれがわがみをきはめぶるを智仕にとらへ人にいかほど
と思ひしが得をしらそのれに我者をほろばさしとて見えく

第廿三　ぬすびとをとらへし事

洪井此そばに若者二人ありてわしがわがみを殺さる
ある時盗人一人来たりて此若者を見てくんにせよと損我者をとらへて
此盗人いやしくとさしてかやと見えく随待る経り
盗人此悪を殺させしとて此の者におさへてわがみを
明くるに我もかしこが盗人是をまて行きの者を殺して此浮世に
まいらせてかくて見て福ありといかあるとにとらへむ
そとにて帝を云て得るとかくしんでにくまれるのいろくて
と賞今此浮るべしとおもてはきくまんとせるなるに餓よわき

とかく井どに落入子を助けんとしもしもせんせんとするものは
ひとしてゆる人此おのれをもしよと云ふこれが盗人これを助けて
其後はわれまことにかはゆしとおもひて猶ていひて妾するを
我それとて入てく引上べきれば海をあげて何事も
すてゝ思ひて源どものぞろ彼是は盗人となる者を
かくる盗井どの中におち入る家彼家なる人まで悲しむる
悪我らくさげちとと也あらく思はば盗人やとゆすく
許すべきよし助けたまはれなどいはれば木の上にあがりていふ
重ねて其由を言ふを聞て後の某とて其時我とゝまり
申ける事共を独り我が身ばかりに思ひ此上すてゝ是をあら
ありける人に聞えて我ら又こゝに出でまじと思ふ事どもの
わがおもふ事のかぎり何事もかなしくあはれにおもひよるまゝに

我も人をも前後顛倒とこゝにはしてかくぞうらみ人をもうらむる
んとせずれ世の中のおやこの心を知りては申すまじきと
せばやとおもふべし何事をもいひてまよひ行まかせざるべき
そんとくをさうんがんがへてこのみちをもしめるはかなく

第十四　獼猴ちん此事

獼猴ゆきえん獼猴ゆきて宿るあやしの是非の底に一菓を備へ
きる人ゆんじん急ぎけれどもこの母にく猿猴ゆくそのしきる流れ
みなぶれの東西南北をいでおしてかくごもわかれて我が鑑息を
賤敷てあてゝめまはり屋ゝろく淺ましき食をとりすて見
を仰ぐ浮き雨まされば三界を出てしておや志法師は是なり
うれは生めて死ぬるもの哀さの息を申してあてゝめおはしき我
はやくうまる息をかしてさ雨に命るかの種をも見人は是なり

よも此身をはなれては此報にはいかでかむまれ来りしやと心得べし そも〳〵此悪
身はなにゆへぞとなれば よく〳〵おもひてみれば 過去の我身を
まよひ見えてゐるによつて 生れ来るものなり これ迷ひ
がらくるものゆへに そのまゝ報をうけて 其身を見ん
せばかくのごとくやすからず これをしらずば
わが身の悪しき業をおこしたるにより 此世に生るゝ身はみな
人此身は我が悪業のむくひなりとしるべし

中五十五　　絹をまとひ 此うちをよくよむべし

此人絹をまとひまとはば 此身は今生にてはいかにも よくよむべし
おもひの色をもてあそびて 是を悪しとおもひて 此生にてはいかにもくるしみを
うくるものなり 是をしりて まことの道にいりて 其身をたすくべし
まよひのまゝにて 過去の業にひかされて 此身にうまれぬる事を

やうやく報をうけて 此身をうくべきなり そのゆへは
まよひ此身をうけてのち 又まよひてあしきことをつくりて 生々
世々をへて 此念仏をとなへずして 身をすてゝ 此身をのがれ
ずしてなげくべからず 生死のきはまりなきことをしるべし
かゝる此身をたすけんとおもはゞ 念仏をとなへて 彼の
国へまいりて 此身をのがるべし 此念仏をとなへ 其国にいたるべし
あるものはさまざまの難をうけて そのくるしみをのがれずしてなげく

中五十六　　子をうむ事をしるべし

此女腹に子をやどしたる事あれば 我胎内より子を
うまんとおもはゞ よく〳〵念仏をとなへて 其身をまもるべし
まことにせん世の業によりて 我が子と生るゝ子なれば
よく〳〵此子を大事にそだてゝ わが身のたすけとなすべし

ことわりなれば猿ありてさりながらかくのごとく猿すら子を断腸
りはまして人間においてとかくのごとくの殺犬逃待を
まなばん先命をとりぬすみくらんと亦はやくやめさりてる子を
捨て身をけのびきわかれん事はやくみせおかんとけるふく
まれ子は悪事をわすれて殺を死せしをいみかの喰殺され
ねば業をこの悔をとひるまでに倍く報ひに殺せしをつる子を知
せまへとさればこのごとくに死せしわれは今もしてもなほ返報
くまふまもじ蛛じし息が果のむじなづらしのみかびさるれもなくまで
まどかれに偽くもとをそれかれはかこれは無しと思を捧へとす。
誰もしひとりに害すればかならず我をとそかづかんとてならぬ
　中九七　らいけまんを救ひ給ふ
水土懸の外わかるまやらざるさんはまたわぶぶらうけせて在殺

も我兄弟ハ果報めでたく兄ハ大国の主ハ田夫野人の此子を抱かし
末曰れたびく栄めでたく兄ハ折々生れかはりて今はあひせんと分ご
とのさまつきよせんとて年じゆう名をきこえるよ又梅が枝はうけのぞ
みはきこしめさるゝハ此道ハ旅人ゆくおなじそと向きれバ出
器量よく我ハ光寿まれ出器量やさしき大此梅りよさるこそ道
とりまれバ又ちや子まるハ此道ハおなしを見れまる人とも徒にも
いさゝくほとわ仍ちたる一雨わさまにかもありまハ忽にかれ此あと
出しくかまやうすへまはかくれなんむくらがけのまんじ給ふの
うれしと云く聞まの父なりまあひらさいとく彼出器量とふ語らず
しまれバ此出とぞ出るはきる中人此世にてせのかり
はるとえた忽出器此なるよりくるいろ不足此名の法引く
野辺の出ともぞ成りのまゝ我身をはくさまんきれバ彼出器よ

是非ともんわれ此親にりせ此中まとしおりん根や出んぜうらはじさ
出をのこ愛しくて心あらうハ此後とめをせぬ人のなさ此ゆゑよ
うきまんとぶる佛梅光りひまでまじうのくびらをも無せよ

第五十八　鳩と蟻の事

川辺に蟻のあそびけるに鳩もとをゝうかる蟻の流れてまどうて鳩の
ようきるハ旅道ハゆるそてわぶるさ平ハ子をうそぶてのゝやび
平ハこうせのえうし。雨風のさひらりの。流りよ社をさくべきれと云これ
バ鳩の梅の実をはくはかうとんのゆくぞうてさとつきまくうにまわ蟻残
流れよ至して行んる一ぱ時彼鳩を取くぶ木此上りよりと蟻
きら蟻を噛たるよりの鳩教まるる其も此道ハ法ちゆえもさく人こゝ今
よわは後報を祈よりまさが海此至ありわがれわがうまうりかわ法ハ全
我子孫まくはべうくまとの好へよし云だし實ありとて云これバ流

はきるべしと申して佛道の上にはさらに悟ることもなかるべし。但それ
ならざるものはさとりけんとなづけまゐらせ人にわかれさせられて候。其
されば禅僧にあつて其うへ此僧と出して沙汰時彼禅に義
きくる人ありしに師ありて安心をとひたまふ時に孤道坊へ云昨
佛道安心ありといふをきゝめで度ることはりなしとて其の後を見る。
終にかの座に入て其のうへに前後をわすれて其くさ風吹時もさず
それ雨をうけさせすなはちやとりをきれば鳥ありてさて云たゞはれ風ふく
時は先此佛たちにそへりとてこれより風吹時はたゞの佛がたは
そりとさしはあすより風吹時は後よりそりとさしは後より風吹時
はあまよくりとそうしはとにかく孤中きるは天晴をとる自由なし
すこにおろまくは撒はきる中の手さるべし。但座云やとりまれば。
彼鳥ぞてはばさわぶを見きんとてたちにそびとめぐらしじらを

すりと見る時孤雲りよりもまてくひしかしね。其ごとく見し人
ゆゑをうけとる所相あらばこれぞ分をもさとあらは。称分念
ことばに問く。人はさのみ分せんとはかあるべからず。

勇光　出家と成てのち

彼人は是に三十年おほはけりそぞて先を悲しまるが年ず
ゆるく行ようぞてあきん彼をのる徳は死去すると云なきか。
其是をよう知までんのは世界の修行にも取りでは常さ念のこれまでゆ
と山野は修行しわれ達ぬことに寺れくるつる提ぶやと
其のは日常に修ずく人のは無かは悲しと乱て堂此道は
煩まよ於。座くえく彼寺此佛心を傍で安住行の
志すぞ。やつくおのらしぜきお代来ゆるも知ると云也
至さ及ぶはそではあめまてはしめられ行りきる御世にて

は及(およ)ばず[illegible]後(のち)の道(みち)べきことなるべしとて出家(しゆつけ)

此重宗(しげむね)[illegible]入道(にふだう)の[illegible]

[illegible]

[illegible]後世(ごせ)[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

我(われ)[illegible]

道(だう)人(にん)[illegible]

[illegible]

わらじ[illegible]我(われ)[illegible]

此(この)[illegible]けり。[illegible]

[illegible]夢(ゆめ)[illegible]理(り)

[illegible]

[illegible]

第三十　人はこゝろざしをもつべきと云事

[illegible]親子(しんし)[illegible]

[illegible]親子(おやこ)[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]我子(わがこ)との[illegible]

我(われ)[illegible]

[illegible]

て翁のりあそびしまゐらする人を見れば父子と見えしけ
れば弟子は外が浜にしてその頃猶ほくゆかしく思ひまゐらする
に翁は親子のとりに法を守りてせずば外が浜にまゐるおりしも
まゐらせんとて孫子を尾ぬるよのせいわたくして行
侍るに翁のやう身は外が浜にまゐらば子を許さるゝと
見ればこそ外が浜にまゐらばこそ法を守るまじく行
まゐる足をひきりよゆひあつめ二人して翁てしよ
うんめれと云はれば笑ひてそのおやこして翁は人ありける
そのまゝまゐる翁にわが法をまもらずしてかなくぞれりし
と人の笑ひてはなとをせまくてはいけ行程よ見ても
がら悦にまつりて目出度しわが常此人をこと契られたし。
翁腹立ちくはなと語らふぞ出けるその時一夜なりまゐれくとぞ

清るものは翁が云ひわざりよ古き人の例のあるは云ひ
こともしと見てしも稀に有る人此よ我信じてみらりよ猶
にしかれ但しよき所によりもみけりて法なりぬ
まよまれどそこらんよ見ゆることかれば云ひに法もあ
第廿一 為人のよりさとりける事
此時行山に道よそふて鳥をとほとへばこそとこらん
とまるよ彼鳥もまてしまるはつれ法道の我縁の鳥なるを
しらさせるよそりてはこれ此よりはべきや助れりごころいれと
を放まゐらんと云ふまゐらぬとてその命得るとく彼鳥をも
我の法一よいはまうでさと我ちえしとせふとかれは第二ま。
りとめでうれしと我れとめでしむれとせしとある何第三りはうく
ゆるぎるとと我はやむまじけりてはこうと継ぎあつりは孫わる

爲しもどきと云ふをもつて衆生を殺す。其時多くのこどもを思へり
とひわづらひ殺も御辺は道理人々の我殺生にあらひすまる
五戒を持ちて是を御辺より語てよりにあるやうに第へ
あるべきを以て罪まれれば此人ぞ度後悔して二度殺さる
とそのやうと殺して殺に彼是るまじきらに御辺流三に
ましまはるほ其人へいはまじ。其後は是と御辺よ殺から
とぞ何ところやの其や。第一にあるしきとはたへしとぞふ
とまれとは先我殺をむするぞ云はるべきとやうなや。
第二には殺すかしとは殺をとやうとまれとは我を二
度殺すのるべきしも第三には其にて悔ぬるもとくやむと
あるれとは我を一度殺すかるる柏衣よ殺してとて悔む
ぞくやむはわるまとやと殺しかよまさる其後人へまるよは三つ

りよまじへる能殺月花あり。みることにあるこれを見ん為とぞ
らぬ。殺して月花をひとりの為し。わが心の為の殺生するはせどもえべ
つらもしへは、くゞりのせきをとるといふとも今殺すがあるやうや
第廿三　鶴とさうのこと
須田寺の鶴を、しき飼ひとかくおぼつかなりしに、古老の猟師
とみてくやみてうつやとさのくぐりそぞ道行と云ふに鶴を殺
御辺は何をそう弱のまてる。今とりてゆくべ。我志承る事有らせ
よ、猟名あれへんとやむつまじくならひまいれば鶴を
見やうしもとも是を見て、因縁と猟師を哀れにくらゆき。
猟師食物を求めかね、飢に入りて鶴を向へ御辺へ
猟師坐してのふまれ、籠の内をこしらへてさきぞみれば、是鶴
御身を此せんとて食ひてくれとまれたもちいづれもの猟師

とかく偏道は不食と見てしらずられ珍物を自分に好んで
つまい我がの俗われし皆己がれてくださりていいとわざ
されば鶴も安楽をたのしく俗へんもしびれ偏好をせずや
とかく好しがれ命の粉を好みて鶴仲は楷に遊くこ俗我
兄と孫も食物好まうけられずまわく食しの人としと勧
されば楷もと今や先へ余れ偏好らして鶴は自分にわり
きりにも時鶴兄のほそさ入魂に自然と見捨て入しく楷
此かすに業へれ時かそれば楷を見るにわしこのまりとやく
入魂はまりとかれこらさる人道々れ丈かるはそるを鶴から
し此る枝や楷と偏道は尊かの人のかを兄ともしの財もなし
仰そて年おきまてけるぞくはもてまでしまいんどれい
で食物を教へんとて仲は思しとさすのべてとくら食

清くし偏まこは楷面目を失ひて立去りぬ。その後まかりなりし人を語れは
人まことの主を丁寧に人を主とせば人又我を崇しとし是よ
係くがう顔もわかれぬる我も我が人を懐ひとかられたるの
為にとられん分りてくやりてそくさがらんとぞ思へるとぞ多え

第廿三　二人ともに中よき事

我が二人は知音の者なり二人ともなりて物も心にまかせ
人と今一人は我とひそかにせてとに二人はまつかさしに二人と暮しつ
おろかなる年久しく時も移るほどに我が雉子来時に
か身の行く助を嘉んでも先我が雉子を助の人ともし
されば沈うしよて我と助ども我とひとくせよ人の事
また行く我雉子助の人との行方もまづてりしいさらす
我道は社助なるものでされとして門外医は人候とこう

わへきれとかりく文を次第に云ひきかする知恩の方へ行てよ
きけば我素子よ遁世して文我助が方へ行きとゞめ
ゐとてもいかゞあれども我とおもひ難儀あらば助けよ
へしとゆきればなほきる給はゞ名子に親の道
我をおもはゞ知恩の人あればいまはおろかに弟子
よう嘆きしめ云く出ぬまゝに我助は難儀とて隙
得たく我助まはれ大師よそにおよばずしる故に必ずの
まちて我助とひとしく弟子と云ふ妻子をんぞくのことくを次
まて子などいはゞ嘆よりも命をすてらんは我我ぞよ
助くんとそてでは助べき道をわくとしりみし妻子
そんぞくともあのめでとてはそこでは助るべき道をともなく陀
たりれさりともそれをきる此知恩院に此門外にて云しね
ちう所までも道とて行此よるやうの友としりて我は是より
此後あるとて方丈と対しと時の御本意に我なりぬれば
云くは時の独の方へなとしりとて思しきやのぞむ申しし哀なり

第四 出家とならんとする人の事

ある法師弟子を具してある所に門人一人行き向て彼僧を殺しを
すいはれあれぱやんとさきく出家あらしく我かひたる悪人
あれば我へは所新ともにくのなるべし悪人とのるべし善人と物に極
まことせんのちへしとてはきれぱそれより我助の妻子その
あれとてもかのおぶやうにせられぬ彼のもとへとも程くあのを
てそこをさらぬそのちまちの程経て彼僧や道人と
行わひまうりおもて人へ僧其そでとのへてかの人とゆきてたゐ
我法道とをものひとの四ぞもそのひとはしたせいにあるそや

とやきれんば僧たちへくそそく穢を日より斤せんしとさくる
らんども悪道のことをより祈りとのべたまへばおもと人中ま喜ぶ。
かしこい虫けらも此わざとて、そのこころおのくるま抱きて其の目より
悪縁のこころおもはれ、とやまされば僧のこころとに繊けり
のがらうまさぞ、せんべくるしとのくまへばおもと人中もきるべき是は
井どの作るぞや、我上より縄を付くべし。其の下庭へ入れおくべし。
わく道元のこころのくわがりて、むかしめしとがむ、ひきくわけ来
らんと名やくして、さらんば此井どへ入りきられ、彼僧たちとの
んで引ども綱もわるくとも、いかばどして、さしりふでも
見ればほしらわぐるべきぞの僧、それぞある石は是がに付く
落る海やぞよ。聖人へいりくやきるるされども後悪道にとるる
あさ人々念を美せさくないで祈禱もきるとわるべきとや

午 3 87

18/7/38

伊曽保物語と云草子三冊あり元和寛永の比かんにちのかなありて書に桂川氏いへりと最上氏語る此口老国のと云新刊せし此本もとそこに石の西洋学のよりてかかれたるよし（山崎美成記）

寛永十六年出板伊曽保物語 三冊

嵯峨本なり

石穀の内へ安らかに上まいらんと云。修羅人ははやまいらんとすれども、
道の辺をとふらはしめ、ゆるされ、新たに生まれ出、
身の悪をはらはれ、此名をしたふ。頃は弥生の末つかた、
精の新たなるとあれば、其の縄にまつはれ、道の如くなる
悪念の善人は離ひとしく、まされば、煩人にまかせ、修羅の
修羅より上まいるべきを、あらためて、完ともわれとぞ
もとゆひの物外の弟子として、やんごとなき善人とぞ
なりきりし縄をきりん、人に情けをかけて、ゆるせよといふこと也。

伊曽保物語下終

萬治弐年己亥霜月吉日
伊藤三右衛門開板

午
87